

---

# 世界を救う龍と少年の物語

残月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界を救う龍と少年の物語

### 【Nコード】

N2642U

### 【作者名】

残月

### 【あらすじ】

アリエル暦4020年：光龍と闇龍の戦いで闇龍が勝利し、世界は暗黒時代に入った。それから10年たち光龍の力を得た少年バニッシュ・ローレルと旅で出会った仲間達が闇龍を倒し世界を救うための冒険が始まる！

## プロローグ（前書き）

皆さん、はじめまして。残月です。前から小説を書いて見たくて  
思い切って投稿してみました。初めてなので上手くないですけど、  
読んでくれるとうれしいです。では、どうぞ。

## プロローグ

アリエル暦：4020年

辺り一面焼け野原になっていた。家々は焼け、人々の呻き声が聞こえる。そこに一人の少年がいた。その少年は必死に叫んでいた。「お母さん、お母さん」と呼ばれる先に一人の女性が瓦礫の下敷きになっていた。「バニツシュ・・・早くここから逃げなさい。」「嫌だよ。お母さんを置いて逃げれるわけじゃないか。今助けるから。」そういつて、バニツシュと呼ばれた少年は瓦礫の下敷きになった母親を助けようとしたが、まだ幼い少年にはどうすることもできなかつた。その時、「ガラツ」という音が聞こえてさらに家が崩れてきた。

「あつ・・・」と小さい声を上げた時、「トン」と押された。そう母親が最後の力を振り絞つてバニツシュを助けたのだ。

「バニツシュ・・・強く生きるのよ・・・」といい完全に瓦礫に埋もれてしまった。

「お母さんー」と叫んだがどうしようもなかつた。バニツシュは、母の言葉を思い出し、

「早くここから逃げないと。お母さん助けてくれてありがとう。そして、さよなら」といいその場から逃げ出した。

どこに行けば良いのかわからず、ただがむしやら走って逃げていると突然すさまじい風が吹き「うわっ」といい大量の瓦礫と共に吹き飛ばされてバニツシュは意識を失った。

上空では、二頭の龍が戦っていた。一頭は光輝く龍で、もう一頭は闇色の龍であった。「終わりだ！光龍レイディアントよ。」と低い声を響かせ、闇龍ヨルムガンドは強い一撃を与えた。

「グギヤアアアー」という悲鳴と共に光龍レイディアントは地面に叩きつけられた。」

「これで、私の邪魔をする者はいなくなった。」といい残り闇龍は夜の空に消えていった。

（くっ、傷が深すぎる。このままでは私は死ぬ・・・それだけは何としても回避しなくては・・・）と朦朧とする意識の中光龍が思っている、‘ドクン’と近くから鼓動が聞こえた。そこには右腕を瓦礫でやられ意識の失った少年がいた。

（もうこの子の命が危ない。この子を死なせるわけにはいかない。私の最後の力をあなたの命と失った右腕に変えます。そして、いつの日か闇龍を・・・）と言葉を残し、光龍レイディアントと少年は光に包まれた。

## プロローグ（後書き）

改めまして残月です。学生やってます。忙しい日が多いので更新が遅くなるかも知れませんが、一応、1週間から2週間ごとに更新しようと思います。

小説を書くのは初めてなので文章の書き方が下手です。なので、良い点・悪い点があったら指摘してください。

## 襲撃と旅立ち・1 (前書き)

どうも〜残月です。何とか更新できました。

改行したら読みやすくなると思っただけでして、多分前回よりは読みやすいと思います。

では、どうぞ〜

## 襲撃と旅立ち - 1

『起き・・・くだ・・・い。起きてください』

という声で俺、バニツシユ・ローレルは目を覚ました。時間は朝の5時。まだ、寝起きなのでボーとしているとさらに声がかかった。

『もうっ、ボーとしてないでちゃんと起きてください。朝の稽古の時間ですよ』

と言われたので、

「わかったよ。起きるよ」

と声のした方を向いて言った。そこには1本の光輝く剣があった。

声はそこから発せられていた。その剣の名はレイディアント。10年前の戦いに巻き込まれ右腕を失い命の危なかった俺を救ってくれた光龍である。レイディアントは俺の右腕の代わりになり剣になって俺のところにいる。レイディアントは剣の柄についた輝石を通じて話しかけている。俺だけに限っては念話でも話すことが可能だ。

『それでは、朝の稽古をしに行きましょう』

とレイディアントはまだ眠い俺に元気よく言ってきた。

それから2時間後、朝の稽古を終えた俺はこれから朝食に何を食べようかと考えていた。

『今日は、いつもとは違うのが食べたいですね』

とレイディアントは言ってきた。レイディアントは俺と感覚を共有しており、俺の感じたものがレイディアントにも伝わるのだ。

「そんなこといっても、いつもの朝食以外に思いつかねえよ」

とレイディアントに言っていると、

「トントン」

とドアをノックする音が聞こえた。

「はい」

と俺はドアを開けた。

そこには、腰まで届くくらいの金色の髪をしており、青い瞳をもつ少女が立っていた。

「おはよう。バニツシュ」

と挨拶をされたので俺もそれにかえした。

「ああ、おはよう。ソフィ」

彼女の名前はソフィア・エレクトラム。ソフィは10年前の戦いに巻き込まれてケガを負った俺をソフィが住んでいるここラカン村で紹介してくれた。また、俺とレイディアントのことも知っている。

「ええっと、家で朝食を作りすぎたから一緒に食べようと思ったんだけど・・・もう食べた？」

「いや、まだ食べてないよ。何を食べようか考えていたところだから」

と答えて、ソフィを家に招き入れた。

『ソフィ、おはようございます』

「レイディアントもおはよう」

とソフィは笑顔でかえした。

『今日はどんなものを作ったんですか？』

レイディアント（剣のくせに）は楽しそうに尋ねた。

「ふふ、今日はこれだよ」

と持って来た箱の中を開けるとそこには色とりどりのサンドウィッチが入っていた。

「おお、うまそうだな」

と俺もうなずく。ちなみに、ソフィの料理はうまい。だからこうして時々持って来る料理が楽しみだ。とまあ、そろそろ腹も減ったし食べるでしょう。

テーブルについて俺達はソフィが持って来たサンドウィッチを食べ始めた。

少しして、ソフィが俺に聞いてきた。

「バニツシュ・・・旅に出るの？」

と言ってきたので、俺は食べかけのサンドウィッチを喉に詰まらせた。

「ゲホツ、ゲホツ」

とむせた。確かに俺は明日の朝早くに旅に出ようと思っていた。

ソフィは俺の動揺を見て確信したのか、さらに

「私も付いて行っちゃだめ？」

と言ってきたのである。

どう返事をしたものかと考えていると、今まで黙っていたレイディアントが、

『付いて来てもいいですよ。旅は人数がいた方が楽しいですしね』  
と言った。

「なっ・・・」

俺は言葉に詰まった。

逆にソフィはそれを聞いて、

「やった〜。ありがとうレイディアント」

とうれしそうに言った。

俺は念話でレイディアントに話しかけた。

（何てことを言うんだよ！この旅は危険なんだレイディアントも知っているだろう。何であんなこと言ったのさ？）

（この旅が危険だからですよ。この旅をバニツシュー一人で達成させることはかなり難しいですよ。仲間がいた方が旅も楽になります。）

（それは・・・そうだけど・・・）

（大丈夫ですよ。ちゃんとこの旅が危険だっということも伝えます。それからソフィの意思を確認してもいいでしょ。）

（・・・分かったよ）

としげしげうなずいた。

いつまでも黙っている俺を見て心配したのか

「バニツシュー、大丈夫？」

と聞いてきた。

「ああ、大丈夫だよ。ねえソフィこれから旅のことを話すからそれ

から付いていくかどうか決めてもいいんじゃない？」

と俺はいった。

「そうね」

とソフィもそれにうなずいた。

「じゃ、ここからの説明はレイディアントに任せるよ」

と言つて説明をレイディアントに任せた。

『分かりました。では、この旅について話していきましょう。まず、この旅の目的はここガイアルランド大陸に訪れた暗黒時代を払拭して、この大陸の均衡を取り戻すことです』

「均衡を取り戻す？」

ソフィは首を傾げた。

『そうです。そうしなければどんどんこの大陸は悪くなる一方です』  
とレイディアントは言った。

「1つ疑問があるんだけど・・・そもそもなんで光と闇の戦いが起きたの？」

『詳しいことは省きますが、闇龍ヨルムガンドが人間を滅ぼそうとしたからです。それで私は止めようとして戦いが起こったんです。

つまり、この旅に付いてくるということは闇龍に狙われる危険があるからです。どうしますか？』

とソフィに聞いた。

「私は・・・それでも行きたい。バニツシュとレイディアントのことを知つて何かしたいから」

とソフィは決意を込めて言った。

「それに絶対にバニツシュの足手まといにはならないから。お願い」といった。

「ふう、わかったよ。ソフィがそこまで言うんならいいよ」

と俺はそういった。

「やった〜ありがとう。バニツシュ。それに私ねついこの間水霊術士として認められたんだよ」

と言つてきた。

「水霊術士に!？」

俺は驚いた。この大陸には、火・地・水・風・雷の五つの魔力がある。魔術師達はこの魔力を使い魔法を放つことができる。その上に精霊術士というのがいる。そいつらは、魔術師と違い精霊から力を借りて魔法を使う者達である。その威力は絶大なものだ。水霊術士ということは水の精霊の力を借りることができる。ソフィがそこまですごいとは・・・

「すごいじゃんか」

と俺は言った。

「まあ、まだそれほど強力なのはできないけどね」

それでも十分すごいと俺は思った。

『さあ、ソフィが付いていくことがきまつたんです。これからどうするんですか?』

「ん〜俺はもう準備ができてるけど・・・ソフィはどうする?」

「私は・・・あつ、そうだ今日私の家で夕食たべない?お父さんにも言わなくちゃならないし」  
と聞いた。

『いいですね〜そうしましょうよバニッシュ』

とレイディアントがいつてきたので、

「そうだな。そうするか」

と俺もそれに同意した。

「じゃあ、決まりね。私は夕食の準備とかしなくちゃいけないから  
といい、

「じゃ、また後でね」

といつてソフィと別れた。

「今回の旅は長くなるのかな?」

とヴァンさんが言ってきた。

今俺はソフィの家で夕食を食べにきている。ヴァンさんはソフィのお父さんでヴァン・エレクトラムという。この村を魔物から守って

いて、俺も何回か剣の手合わせをしてもらったいた。ちなみに、この人も俺とレイディアントのことを知っている。

「そうですね。この大陸を回るので長旅になりますね」と俺は答えた。

「ちゃんと、旅がうまくいくように祈ってるよ」

「大丈夫よ。わたしがいるんだから」

とキッチンから料理を持ってきながらソフィが答えた。

「全く、私はソフィアがバニツシュ達に迷惑かけないか心配だよ」

「だから、大丈夫よ。水霊術士になれたのよ？」

とソフィが答えた。

「大丈夫ですよ。ヴァンさん。ソフィに何かあっても必ず守るから」とヴァンに言った。

『そうそう、バニツシュが命に代えても守りますよ』

とレイディアントも言った。

「そうだな、ソフィはまだ未熟だ。何かあったらよろしく頼むよ」

「大丈夫です。任せてください」

と俺は答えた。

それから夕食を食べ、談笑しながら後を過ごした。

「そろそろ、帰ったほうがいいな。明日は早いんだろ？」

とヴァンさんが俺に言ってきた。

「そうですね。そろそろ帰ります」

といい、

「それじゃ、夕食ごちそうさまでした」

と言った。

「じゃあ、また明日ね」

とソフィが言ってきたので、

「んじゃ、また明日」

と俺も返事をして、外に出ようとしたとき

、ドォーン、

という音が聞こえ、家が揺れた。

「キヤー」

とソフィが小さい悲鳴を上げた。

「な、何だ？」

と俺は外に出た。そこで目に入ったのは一面火の海になったラカン村の姿だった。

## 襲撃と旅立ち・1（後書き）

どうだったでしょうか？また、良い点・悪い点がありましたら感想に書いてください。後、誤字・脱字・文でへんな所があればそれも感想に書いていただけるとうれしいです。

それでは。

## 襲撃と旅立ち・2 (前書き)

学校の行事で更新が遅れました。

いや〜バトルシーン書くのって難しいですね・・・まあ、読みづら  
いとおもいますが読んでみてください。

では、どうぞ

## 襲撃と旅立ち - 2

「な、何だよこれ・・・」

俺はその光景を見て言葉を失った。そりゃそうだ、ドアを開けたら一面火の海だったら誰でも言葉を失う。俺が啞然としていると、

「どうしたの？」

「どうしたんだ？」

ソフィとヴァンさんが家から出てきた。

「くっ、これはひどいな」

ヴァンさんは周りを見てそう言った。

「な、何でこんなことになっているの？」

ソフィは呆然としてつぶやいた。

そんな風に俺達が戸惑っていると急にレイディアントが、

『皆さん、空中にいるあれが原因です』

俺達はレイディアントが言うように空を見上げた。そこには、巨大な隕石から手、足、翼を生やした龍がいた。

『あれは、閻龍が創り出したメテオドラゴンです』

「なんでそんなのがいるの？」

ソフィの言葉に俺もうなずいた。

『それは・・・』

レイディアントが珍しく言いよどむ俺は不思議に思い、

「どうしたんだ？」

と尋ねた。

『いえ、何でもありません。それよりも今はメテオドラゴンを何とかするほうが先です』

レイディアントはそんな風に言ってきたので、俺は納得いかないながらもレイディアントの言葉に従った。

俺達がどうやって動くか作戦を考えていると、急にメテオドラゴンの体から黒い霧が放出されていた。

「何だ？」

俺はメテオドラゴンの異変に気づいて言った。すると、その黒い霧の中から大量の魔物が出てきたのだ。

「……なっ」「」

俺達は絶句した。何て数の魔物だよ……とか思っているよ、

『考えている場合ではありません。早く対処するべきです』

レイディアントは俺達に言ってきたので、

「確かに。なら私が村人達を救出するでしょう」

ヴァンさんがそう言ったので、

「了解です。なら俺があいつを何とかします」

「な、なら私も……」

とソフィが言いかけると、

「それはダメだ。ソフィアは私と来てもらう」

ヴァンさんはソフィに言った。

「何ですよ！」

と強い口調でソフィが言った。

「よく考える。お前は水霊術士だ。まずは、村人達を守ることが最優先だろ？そのためにはお前の水霊術士の力が必要だ」

「で、でも……」

ソフィはそれでも迷っていた。

「大丈夫だよ、ソフィ」

俺はソフィに向かってそう言った。

「ヴァンさんの言う通りだ。今は村人を守ることが優先だ。だから、ソフィ行ってきて。俺もずっと訓練してきたし、簡単にはやられないよ」

と言つと、

「分かったわ。でも約束して絶対に死なないって、私もやることが終わったらすぐそっちに行くから」

ソフィがそう言ったので、

「了解！」

と俺は返した。

「話はまとまったようだな。では、行くぞ!!」

「分かったわ」

「了解」

ヴァンさんの声と共に俺達は自分達がやるべきことを果たすために動きだした。

<ソフィア side>

バニッシュと別れて私は村人を守るためにお父さんと行動していた。

「ソフィア、村人達を助け出す少しの間魔物を抑えていてくれ。できるか？」

お父さんの言葉に

「任せてよ、水霊術の威力見せてあげる」

と私はいい、大量の魔物に手を向け詠唱する。

「我、今海の精ネレイドの力を借りる。前方の敵を貫く無数の水の槍よ現れろ」

アクアランス

詠唱を終えると手に描かれた魔法陣から無数の水の槍が飛ばされる。

その槍により前方にいた魔物をほとんど打ち抜いた。

「ふう、何とか出来た」

私は安堵したが、私に向かって残りの魔物が攻撃してきた。

「甘いわよ」

私は、素晴らしい詠唱を開始する。

「我、今海の精ネレイドの力を借りる。我が元に水の槍を具現せよ」

ロンギヌス

詠唱を終えると私の手にロンギヌスが現れた。

「はあっ!!」

私は攻撃してくる魔物に向かってロンギヌスで貫いた。

私自身あまり接近戦闘は得意じゃないが、自分の身は自分で守ると水霊術士になるときに教わったのである程度は戦うことが出来た。

「ソフィア、村人全員を救出できた。魔物が入らないように結界を張ることは出来るか？」

「任せて」

私はお父さんにそういい、急いで村人の所に向かった。村人には幸い大したケガではないのでホッとした。

「よし」

私は気合を入れて詠唱する。

「我、今海の女神レウユラアの力を借りる。力なき者達に水の加護を与えよ」

アクアカーテン

と詠唱が終わると村人達を包むように水のカーテンが出てきた。

「ふう、これで安心だ。お父さん終わったよ」

私は魔物と対峙しているヴァンに声をかけた。

「よくやった、ソフィア。ここは私に任せてバニツシュの加勢に行きなさい」

「分かったわ。待っててね、バニツシュ」

と私は小さくつぶやきバニツシュの元に急いだ。

<バニツシュ side>

ソフィと別れてから俺はメテオドラゴンの元に走っていた。俺はさつきレイディアントが何を言おうとしたのか気になって聞いてみた。

「なあ、レイディアント」

『何ですか？バニツシュ』

「さつき何言おうとしてたの？」

「ああ、バニツシユには伝えなくてはなりませんね。メテオドラゴンがこの村に現れたのは私がいるからです」

レイディアントは申し訳なさそうに言った。

「レイディアントがいるから？」

「そうです。闇龍は私の力を狙っているからです。私はバニツシユに力を与えて私の力を闇龍に気づかれないようにしていたのですが、訓練の時に力を解放しながらしていたので闇龍に気づかれたのでしよう。まさか、こんなに早く気付かれるとはおもいませんでしたが、

．．．

レイディアントは俺にそう話してくれた。

「．．．．．」

俺が黙っていたので、レイディアントは

「すみません、バニツシユ。私のせいでこんなことになってしまっ

て」

「いや、気にするなよ。それに俺だってこれまで訓練してきたんだ。それを発揮するいい機会だ」

俺はレイディアントにそう返した。

しだいにメテオドラゴンに近づくと、

「光龍の力を宿した者はどこにいる。出てこないならこの村全てを焼き尽くす」

とか言っているのが聞こえてきた。

そして、俺はそいつに向かって、

「おい、メテオドラゴン。光龍の力はここだ」

と叫んだ。

「ふん、貴様が光龍の力を宿したものか。まだ、こんなガキだったとは．．．命惜しくばその力をこちらに渡せ、さもなければこの村を焼き尽くした後に光龍の力を奪うまでだ」

と言ってきたので

「誰が渡すかよ。この村をこんなにしやがって。お前だけは絶対に許さねえ。覚悟しろ」

「ふっ、なら来てみる」  
こうして俺の戦いが始まった。

「レイディアントの力の40%を解放！」  
俺が言つと刀身が輝きだした。そして、光の衣を纏っていく。この状態なら身体強化され、魔法が使えない俺でも光龍の力で使うことができる。

「レイディアント、援護よろしく」  
『分かりました。援護します』

そう言つたのを確認し俺はメテオドラゴンとの距離を詰めた。家の壁を使い跳躍し一気にメテオドラゴンの所まで行く。

「おおおおお」

俺は鞘から剣を抜き放つ居合い

ギン

という音でメテオドラゴンの硬い皮膚に弾かれた。

「くそ、かてえ」

「そのような攻撃など効くか。ふんっ」

メテオドラゴンの体当たりをくらい吹き飛ばす。

「ちっ、このままじゃ」

俺はレイディアントの力を使うことにした。

「我が右手に宿りし光龍の力よ。我が身を守る光の盾となれ」

そうつぶやくと、光の盾が現れた。

ドゴンという音と共に地面に叩きつけられたが、光の盾のおかげでダメージは少なくてすんだ。

「レイディアントどうすればいい？」

俺はレイディアントに聞くと

『まず、翼を攻撃して地面に落とした方が戦いやすいと思いますが』  
「確かにな。了解だ」

と俺はいい、光龍の力を腕にためる。そしてもう一度メテオドラゴンの所まで跳躍する。

「また来るか。効かんというのに」

馬鹿にしたような口調でいわれ俺はメテオドラゴンの爪で切り裂かれたが、俺の姿が消えた。

「何!？」

メテオドラゴンは驚きの声を上げた。

「残念だったな。これでもくえ」

ズババン

奴の翼に連撃を与えた。

「ギヤアアア」

と苦しそつに叫んでメテオドラゴンが地面に落ちた。

「よしつ、成功だ!」

俺はそう言つて地面に着地し、地面に落ちたメテオドラゴンと向き合った。

抜刀術ー閃光ー

俺は身を低くしメテオドラゴンとの距離を一気に詰めて切り抜く

ギーン

という音がしてメテオドラゴンの皮膚に傷が付いただけだった。

「これでも切れないのかよ．．．」

正直困つたな、あれだけ硬いと俺の剣じゃ傷しか負わせられない。

「ふはは、効くものか」

そついつて火炎弾を放ってきた。

「ぐっ」

メテオドラゴンとの距離が近かったせいでもろにくらってしまった。  
『大丈夫ですか？バニツシュ』  
「なんとか」

レディアントにそう答えた。だがどうする。俺が考えていると

#### 火炎弾

いきなり飛んできた。

「しまった」

考えていて防ぐのを忘れていた。やばいやられる。そう俺が思った時

#### アクアシールド

俺の目の前に水の壁が出てきて火炎弾を防いだ。

「大丈夫？バニツシュ」

聞き慣れた声に俺は

「ソフィか、助かった。サンキュー」

「ケガしてるじゃない。待ってて今治すから」

そう言つて、

「我、今海の女神レウユリアの力を借りる。傷つきし者に癒しの力を」

#### キュア

ソフィのおかげで傷が治っていく。

「ありがとう」

ソフィに礼をいい、再びメテオドラゴンに向き直る。

「チツ、その魔力・・・精霊術士か」

メテオドラゴンは苦い声で言った。

「だが、お前ら2人が揃った所で俺を倒すことは出来ん」

俺達に向かって叫んだ。

「やってやるさ。ソフィ、レイディアントいくぞ」

「任せて」

『出来る限りあなたの補助をします』

さあ、反撃開始だ

ソフィが来てくれたおかげでかなり戦いが楽になった。やはり魔法の援護があるのは心強い。

「ソフィ、あいつには俺の攻撃はあまり効かない。トドメはソフィの魔法でさして。俺があいつの隙を作るから」

「了解。気をつけてね」

ソフィの言葉を背に受け俺はメテオドラゴンとの距離を詰めた。

『バニツシュ、メテオドラゴンに一撃の攻撃は効きません。ここは連撃で攻撃した方がいいかと』

「了解」

俺はレイディアントの助言を受け、メテオドラゴンに切りかかる。

ギン、ガン、ギン、ギン

「ええい、鬱陶しい」

メテオドラゴンは反撃して俺に攻撃してきた。俺はそれを避け再び切りかかるが、メテオドラゴンはそれを回避した。

「全く鬱陶しいたらない。これで終わらせる」

そういうとメテオドラゴンの頭上に大きい魔法陣が展開される。

『あれはまずいです。かなりの魔力です。まさか・・・』

レイディアントが言おうとしたことを理解して

「まさか、メテオか」

俺の言ったことは本当だったらしい、奴は

「そつだ。この村を焼き払ったこの魔法でお前らを殺す」

「やらせるか！」

奴に近づいて攻撃したが、

ガキン

と何か見えないものに弾かれた。

「くっ、これは・・・」

『魔力障壁です。今の力じゃ破ることは出来ません』

「ふはは、これで終わりだ」

そういつてメテオを放ってきた。

「くっ、だめか」

俺が諦めかけたとき

「そうはさせないわ!!」

と後ろからソフィが叫んで、そして

「我、今海の精ネレイドの力を借りる。全てを打ち砕く水泡よ現れろ」

アクアレーザー

詠唱をし終えて魔法陣から高圧の水が発射され、メテオを砕いた。

「な、何だと・・・」

メテオドラゴンは驚きを隠せなかった。

「バニツシュ、今だよ」

ソフィに言われ

「おおおお」

俺は剣を振り下ろして奴の魔力障壁もろとも、皮膚を切り裂いた。

「グアアアア」

と苦痛の悲鳴を上げた。

「まだだ、我が右手に宿りし光龍の力よ相手の動きを封じる鎖よ現れろ」

俺が唱え終わると光の鎖が出てきてメテオドラゴンの動きを封じた。

「ソフィ、トドメをよろしく」

「任せて」

そういうとソフィは、

「我、今海の精ネレイドの力を借りる。敵を貫く巨大な水の槍よ現れる」

アクアランサー

メテオドラゴンの頭上に魔法陣が展開し、巨大な水の槍が現れた。

「くそおお」

と言ってアクアランサーがメテオドラゴンを買いた。

「くくくつ、まさ．．．か俺が．．．やら．．．れる．．．とは．．．

だが覚．．．えて．．．おけお．．．前ら．．．の敵は．．．我らと．．．

．．．お前．．．達．．．と同じ．．．人．．．間．．．だと．．．いう．．．

．．．こ．．．と．．．を．．．」

といい残しメテオドラゴンは消えていった。

「ふう、終わった」

俺はそうつぶやいてソフィを見て

「ソフィも大丈夫だった？」

「うん、大丈夫だったよ。でも．．．」

村のほうを見て悲しそうに言った。

俺はそんなソフィに声をかけられなかった。

『とりあえず、終わったのでヴァンの所に戻りましょう。敵も何やら気になることを言っていたので』

「気になること？」

俺はレイディアントに聞いた。

『ええ、メテオドラゴンはさつき、人間も狙ってくる』と言いましたよ。たよね。おそらく、閻龍が人間をも利用していると見ていいでしょう』

「そうか．．．かなり大変な旅になるな」

俺はそう言った。

「まあ、とりあえずヴァンさんの所に行くか。ソフィ」

「そうだね」

と悲しそうな声で言った。

俺達はヴァンさんの所に行って今回のことを話した。このときにはソフィも落ち着いていた。

「そうか・・・そんなことが、まあ2人とも無事でよかったよ」

ヴァンさんは笑顔でいった。

「すぐ旅立つのかい？」

「ええ、少しでも早く行こうと思います。すみません、村の復興を手伝えなくて・・・」

俺が申し訳なさそうに言うと、

「気にするな。事情が事情だしな。それにもう村人も村の復興をしているし、人でも足りている」

そういうと村の方を見る。

たくましいなこの村は俺はそう思った。

「それじゃ、そろそろ行きます。今までありがとございました」  
俺はヴァンさんに礼を言った。

「おう、元気で行って来い。ソフィアも気をつけてな」  
と俺とソフィに言った。

「はい」

「大丈夫よ」

と言って俺達は村を後にした。  
こうして俺達の旅は始まった。

## 襲撃と旅立ち・2 (後書き)

やっぱりバトルシーンは難しいですね。長くなりすぎた気が・・・  
何かアドバイスがありましたら書いてください。また、誤字・脱字  
がありましたらそちらも書いていただけるとありがたいです。  
では、では

## 人物紹介&世界観&用語集(前書き)

どうも〜残月です。

ものすごい早い段階で人物紹介になってしまいました・・・  
べ、別に次の話が思い付かなかったとかそういうのじゃないんだか  
らね！

ごめんなさい。うそです。話が思いつきませんでした・・・  
まあ、読んでください。

では、どつぞ〜

## 人物紹介&世界観&用語集

### <人物紹介>

バニツシュ・ローレル（男）

この物語の主人公。光龍と闇龍の戦いに巻き込まれて負傷するも光龍レイディアントの力を得て一命を取りとめた。

闇龍を封印し、ガイアルランド大陸に訪れた暗黒時代を払拭するために旅にでる。とても仲間思いである。

武器：光龍剣レイディアント

バトルスタイル：抜刀術

補足：バニツシュは魔力がないため魔法が使えないが光龍の力を借りることにより魔法を使うことができる。

ソフィア・エレクトラム（女）

この物語のメインヒロイン。彼女が住むラカン村で傷ついたバニツシュを見つけ介抱した心優しい少女。光龍レイディアントとバニツシュのことを知っていて力になりたいと思っている。

水の精霊の力を借りて魔法を使う水霊術士である。

武器：魔法で作った水の槍だが、主には魔法攻撃

バトルスタイル：援護

ヴァン・エレクトラム（男）

ソフィの父親。ソフィの母親が亡くなってから男でひとつでソフ

イを育てた。ソフィ達が住んでいるラカン村を守る兵士でもある。ソフィと同じく光龍レイディアントとバニツシュのことを知っている。

武器：大剣

バトルスタイル：近接戦闘

補足：ヴァンは、魔法を使うことができない。

光龍レイディアント

光の力を宿す龍。光龍と闇龍の戦いに巻き込まれたバニツシュの命を救った。今はバニツシュの右腕の代わりと武器になっている。闇龍を封印しようとしている。

武器の形状：剣

<世界観>

この物語の大陸であるガイアルランド大陸は光龍と闇龍によって創り出された。光龍と闇龍は人々を創り、生きる力を与えたが、次第に人々は傲慢になり争うようになったので闇龍は人々を消そうとしたが、光龍が止めに入り光と闇の戦いが起こった。

<用語集>

精霊：ガイアルランド大陸が創られた時に出てきた存在。なぜ、出てきたかは不明。

地・風・火・水・雷の5つの属性の精霊がいる。

魔術師：魔力を使い、魔法を行使する者

精霊術士：魔術師の上位者。精霊の力を借りて魔法を行使する者。

その威力は絶大で、魔術師の比ではない。

精霊術士の数は少ない

## 人物紹介&世界観&用語集(後書き)

読んで頂きありがとうございます。一応こんな感じでした。人物紹介はまた人数が増えたら書いていこうと思っております。

次からは本編に戻ります。読んでみてください。  
がんばって書かなくちゃな

それでは、また。

## 道のり（前書き）

更新遅れました。夏かぜのせいですね。いやゝ辛かった・・・  
まあ、治ったので書いていこうと思います。

では、どうぞ〜

## 道のり

「はあ、でこれからどうするのさ？」

俺はレイディアントに聞いてみた。メテオドラゴンの襲撃があつて、それを防いだ俺達は早く閻龍を封印するために旅をしている。今、俺達は街道を歩いている。周りは緑が多く、大した魔物も出ない所だ。

『どうすると言いますと？』

「これからの目的だよ。旅に出る前は簡単な説明しかなかったろ。具体的にこれからどうするかだよ」

「あ、私もそれは気になってたんだよ」

今まで黙っていたソフィが俺の言葉に同意した。

『そうですね』では、具体的な目的を話しましょうか。過去のことと混ぜながら話すので少し長くなりますがいいですか？』

「ああ、別にかまわない」

「私もいいよ」

俺達がうなずいたのを確認してレイディアントは話し始めた。

『前にこの旅の目的を簡単に説明しましたね。まずは、ソフィが前に聞いてきた光と閻の戦いが何故起こったかについてです。このガイアルランド大陸は私と閻龍が創ったものです。そして、私達は人間を創りこの大陸に住まわせ、生きる力を与えたのです。しかし、人間達は次第に傲慢になり、争うようになつたのです。閻龍はそれを見て人間の愚かさを知り、滅ぼそうとしたのです。ですが、閻龍だけでは人間を滅ぼすことができないので閻龍は最終手段にでたのです。それは、古の古代兵器<ラグナロク>です。これを発動すればこの大陸ごと無に返すことができると言われていました。それを使おうとしたので私はそれを止めようとして光と閻の戦いが起きたのです』

「じゃあ、なんで閻龍は勝つたのに<ラグナロク>を発動させなか

「つたの？」

「先ほど、閻龍が<ラグナロク>を発動させようとしたと言いましたが、少し語弊があつて、正確には閻龍は私に協力を求めたのです。なぜなら、私は閻龍と共に<ラグナロク>はあまりにも威力が強すぎたので、私はそれを封印しました。封印した時にできた鍵を使って<ラグナロク>が使われることのないようにそれを五つの欠片にしてガイアルランド大陸にある塔にそれぞれを封印したのです」

「そこまでレイディアントの話聞いて、俺は今回の旅の目的が分かった。」

「なるほど。ということはその五つの塔を巡って、五つの欠片をこつちが先に集めようってわけか」

「その通りです」

「それじゃあ、まずどの塔からいくの？」

「まずは、ここから一番近い封印の塔で地の塔と呼ばれている所ですね。近いといっても距離があるのでまずは、途中の休息の町レストアに寄って情報とか集めましょうか」

「確かにメテオドラゴンとの戦いで準備がろくに出来なかったからな。俺はそんなことを思い、

「いいんじゃないか。まだ戦闘の疲れも残ってるし、レストアで1泊してもいいんじゃないか」

俺の提案にソフィが

「賛成！」

とうれしそうに言った。

「レイディアントもそれでいいか？」

「そうしましょうか。レストアは割と大きい町ですから、色々買い物もできますしね」

こうして俺達はレストアに向けて歩きだした。

特に道中で魔物と出会うことなくレストアが見えてきた。まあ、レストアまでそれなりに距離があつたので俺もソフィもくたくただ

った。

「やつと着いたか〜」

俺は伸びをしながら言った。着いたのはだいたい昼頃だった。

「ラカン村から結構距離があつたね〜」

ソフィが言ったので、

『お疲れ様です』

とレイディアントが労っていた。

そういえば俺はレストアにきたのは初めてだったのだ。まあ、ラカン村からあまりでなかつたからな。

レストアに入ると結構にぎやかな所だった。露店も結構並んでおり、人も多かつた。休息の町と言うだけあつて旅人達は必ずここに寄るのだろう。

「ソフィはレストアに来たことあるのか？」

「何回かお父さんに連れられてきたことがあるよ。そういえば、バニッシュは初めてだったね」

「ああ、驚いたよ。かなり人がいて」

俺がそんな風に話していると、

『とりあえず、宿を探しませんか』

レイディアントが言ってきて気付いたが、俺達はレストアの入り口で立ち止まって話をしていたのだった。

「おっと、そうだな」

いい加減疲れたし、俺達は宿を探し始めた。

宿は割りとすぐに見つけることができた。まあ、昼頃だったしな。宿に入ると恰幅のいい主人が迎えてくれた。

「いらつしやい」

「部屋を借りたいんだけど空いてるか？」

俺が主人に聞くと、

「ああ、空いてるよ。まだ昼だし客もあまり来ないからな」

「なら、一部屋貸してくれ」



「いい部屋だなあ」

「そうだね」

ソフィはもう大丈夫なのかいつもと同じようだった。

「ふう、少し遅いけど明日の旅に必要な物を買に行くがてら昼飯食いに行くか？」

俺は荷物（とはいってもそんなにない）を置きながらソフィに言った。

「そうだね。お昼まだだったし。お腹空いた」

ソフィも同意したので俺達は宿を後にして、外に出た。

レストアの通りには多くの出店が出ていたので、俺達は食べ歩きをしながら必要な物を買っていくことにした。

「ふう、大体こんなもんか」

俺は骨付き肉を食べながらソフィに言った。二人の手には旅に必要な薬や保存食の入った袋があった。ちなみにソフィはわたあめを食べていた。

「そだね」

ソフィはわたあめを食べながら答えた。

『ところで、バニッシュ残りリーフはいくらですか？』

レイディアントが急にそんなことを言ってきた。

「300リーフってところだな。なんでそんなこと聞くんだ？」

『いえ、リーフが残ってるんだったら二部屋借りてもよかつたんじゃないですかね』と思っただけです』

なんで、今になってそんなことを言うんだと心の中で思った俺は、別にいいんだよ。手持ちリーフは少ないより多いに越したことはないから」

『まあ、別にいいんですけどね』

とレイディアントは言ったので、

「何だよそれ」

と俺は嘆息しながら言った。

すると、ソフィが、

「ねえ、バニツシユ。そろそろどこかに入って休まない？もう歩き回って欲しかっただよ」

と言ってきたので、俺は確かになと思った。それにもう辺りは薄暗くなっていた。結構歩き回ったんだなあと思い、

「そうだな。どこかに入って休憩するか。明日の情報収集もしなくちゃいけないしな」

そういって、俺達は近くに酒場があったのでそこに入ることにした。

辺りが暗くなり始めたからか酒場には結構な人がいた。俺達も席に座り水だけ頼むことにした。食べ歩きしながらだったから腹がいっぱいで何も食べる気がしなかったからな。

とりあえず、ソフィと少し雑談しながらそろそろ情報収集するかと思っていると、中々体格のいい二人組みの男が話しているのが聞こえた。ハンターかな？と思い聞き耳を立ててみる。

「なあ、お前聞いたか？また、あの砂漠で犠牲者がでたらしいぜ」

「ああ、聞いた。まあ、運が悪いとしか言いようがないなあ。バジリスクのうるこなんて手に入れようとするからさ」

などと興味深いことを話していたので、話を聞いてみるか。そう思い、ソフィに席で待つよう言って俺は二人組みの男に話しかけた。何でソフィを残したのかって？それはこういうのは男のすることだろうと勝手な判断だ。

「なあ、あんた達。その話もう少し詳しく聞かせてくれないか？」

「ああ・・・？」

俺の声に反応して男達が俺の方に顔を向けた。こういう時、話を聞くには何かそれなりの物を渡さなくちゃいけないとか何とかヴァンさんから借りた本に書いてあったなあと思っていると、案の定

「おいおい、兄ちゃん。ただで話を聞こうてか？そりゃないだろう？」

「そうだな。1000リーフ払えば話してもいいぜ」

何て言ってきた。うーん、まいったな。．．．今の手持ちは300リーフだ。1000リーフなんてとてもじゃないがない。どうするかと思いいポケットを探っていると何かがあった。取り出してみるとメテオドラゴンを倒した時に手に入れたうろこだった。まあ、龍種の素材は高いからなこれで良いだろ。そう思い俺は、

「これでいいか？」

とメテオドラゴンのうろこを渡した。

「へへっ。龍種の素材か。まあいい。教えてやるよ。で、なにが知りたいんだ？」

「ああ、さっきあんた達が言ってたあの砂漠やバジリスクのうろこのことさ」

「ああ、お前もあそこに行こうって奴か。全く命知らずだな。まあいい、あの砂漠っていうのはここから東に行ったら砂漠地帯になっているのさ。名をデザートラビリスなんて呼ばれている。砂漠の奥に進んでいくと帰り道がわからなくなって迷うんだと。だからそういう風と呼ばれているんだ。それと、バジリスクのうろこっていうのはどんな病にも効く万能薬のことさ。バジリスクっていうのはその砂漠に住んでいる魔物で、そいつに傷を付けられると石になっちゃうんだ。それで、うろこを取りにいった奴は全員石にされて帰ってこなかったという話だぜ」

男は一通り話し終わるとテーブルに置かれた酒を飲みほした。

「ふう、聞きてえことはそれだけか？」

「ああ、後もう一つその砂漠の中で塔とか見たっていう情報はないか？」

俺はそう聞いてみると今まで黙っていた男が、

「そういえば、運よく帰ってこれた奴が塔を見たとかいってたな」  
そうだったので俺はどんな？と聞いてみた。

「いや、何かそいつもよく分からなかったらしい。とりあえず不思議な感じがしたと言っただけだからな」

「そうか・・・分かったよ。情報提供ありがとな」

「いいってことよ。それなりの物をもらったお礼さ。まあ、何にしまも気をつけるこったな。」

と氣遣ってくれたことに感謝をしつつ、ソフィのいる席に戻った。

「どうだった」

ソフィが俺に聞いてきた。

「ああ、次の目的地はデザートラビリスっていう砂漠だ」

「なら、しっかり準備していかなきゃね」

「そうだな。何が起こるか分からないし、バジリスクもでるっていつてたしな」

とソフィに話していると、

『それにしてもおかしいですね。これも暗黒時代の影響ですか・・・』

『

レイディアントが急に言ってきた。

「暗黒時代の影響ってどうして？」

ソフィが聞くと、

『いえ、昔はあそこら辺はこと同じく緑がいっぱいあったのですが・・・暗黒時代が訪れたせいで均衡がくずれましたか』

「なら！均衡を取り戻すためにも早く次に行かなくちゃな」

そう俺がいい、

「そうだね」『そうですね』

とソフィとレイディアントがうなずいた。

「そうと決まれば宿に戻ってさっさと寝るか」

そう言っただけ俺達は酒場を後にした。

宿に帰り、さあ寝ようと言ったところでソフィが声を上げていった。

「そういえば・・・どうやって寝るの？」

「えっ？」

と俺は一瞬戸惑ったが、すぐに納得がいった。ベットは一つしか

ないじゃないか。うゝんまあ、俺はソファでいいかと思ひ、

「ソフィがベット使いなよ。俺はソファでいいからさ」

と言った。

「いいの？」

「いいよ。俺はソファでもよく寝れるしさ」

「わかったよ。ありがとね。でも、夜私が寝ている時に変なことしないでよ」

ソフィが顔を赤らめながら言っていたが、

「変なこと？」

俺はよく分からなかった。

「っ／＼。と、とにかく何もしないでよ」

そういうと、ソフィはベットに入ってしまった。

(な、何なんだ?)

そう思いながら俺はソファに横になった。寝る前にレイディアン  
トが、

『ダメですね〜バニッシュは』

とか言っていたが気にせず寝ることにした。



## 砂漠のオアシス（前書き）

テスト週間ですが何とか時間が取れたので更新しました。  
忙しくて急いで書いたので、ちょっと文がおかしなところがあるか  
もしれません。

では、ごきげん

## 砂漠のオアシス

「朝だよ。起きて〜バニツシュ」

ユツサ、ユツサと俺の体を揺さぶられる。誰だよ〜と寝ぼけた頭で考えながらも揺れが心地よくもう一眠りしようとした。

「あと、5分だけ〜」

「もう、全く起きる気配がしないね!!」

『こついう時は魔法をぶち込めば起きますよ』

「あ、いい案だねレイディアント。よし、じゃあいつくよ〜」

「我、今海の精ネレイドの力を借りる。水の球よ、我が手に集まれ」  
アクアボール

「いつけえ〜」

バシャと冷たいものが当たって俺は目を覚ました。

「つめて〜」

朝、この宿は俺の大声に包まれてしまった。

「たくつ。起こすんならもうちょっと普通に起こしてくれよ」

俺は、ソフィにぶつぶつ文句を言いながら濡れた服を脱いで替えの服に着ながら言った。もちろん、ソフィは部屋から出ている。

「ちゃんと普通に起こしたよ〜。起きなかったから、ああいう方法を取ったんだよ」

「だからって、わざわざ精霊の力を借りるなよな」

ていうか、こんなことに使われる精霊もかわいそうだなあと思いながら、俺は着替えをすませた。

ソフィを部屋に呼んで、荷物を詰めて宿を出た。出る際に俺は主人に謝っておいた。そりゃ、朝あんな大声だったからな。でも、主人は笑って気にすんなと言っていた。よっぽどいい人なんだなあと

思いながら俺達は宿を後にした。

「バナツシュ、朝ごはんどうするの？」

ソフィがそう言った。確かにまだ、朝ごはんを食べてなかったことを思い出す。思い出すと急に腹が減ってきた。

「レストランを出る前になんか食べていくか？」

ソフィに聞いてみると

「賛成！！」

うれしそうに答えた。

「さて、どこか開いてる店はないかな？」

と辺りをキョロキョロしながら探したが、今日はまだ朝なので出店がない。店を探していると、

「あつたよ〜バナツシュ。ここにしょ」

ソフィが見つけたみたいで、俺もその方向を見た。そこには小さいカフェがあった。どうやら営業もしているらしい。

「そうだな。他に店開いてないし、あそこにするか」

そう言っつて、俺達はカフェへ入った。

カフェの中は小ぢんまりとしていて、きれいにされていた。まだ、朝も早いので客は俺達だけだった。

「いらつしやいませ〜」

中から若い店員の人が出てきて迎えてくれた。

「すみません。朝食を食べたいんですけど、大丈夫ですか？」

俺はちよつと変なことを聞いてしまったと思ったが、他の店は開いてないのにこの店だけ開いていたので、ついついこんな質問をしてしまったのだ。

「ええ、大丈夫ですよ。何にしますか？」

と出されたメニューを見て、俺とソフィは一番安かったモーニングセットを頼むことにした。

「では、モーニングセット2つで300リーフになります」

俺は300リーフ払って、席についてモーニングセットを食べた。

余談だが、ついに俺達の手持ちがなくなってしまった・・・

出されたモーニングセットの中身は、トーストと目玉焼きとコーヒータ。これで1つ150リーフは少し高いなと思いつつ、手早く朝食を食べて、店の人にお礼を言つてカフェを後にした。カフェを出て少しレストアの通りをぶらぶらした後、俺達は名残惜しいが休息の町レストアを後にして次の目的地であるデザートラビリンズを目指すことにした。

「ねえ、バニツシュ。デザートラビリンズに着いたらすぐに封印の塔を探すの？」

レストアを出てデザートラビリンズに向かう道を歩きながらソフィが俺に聞いてきた。

「どうしたんだ？」

「だって、封印の塔はデザートラビリンズの置くの方にあるんですよ？もし見つからなかったら、私達迷うことになるよ。レストアでは、封印の塔の詳しい場所まで分からなかったし・・・」

「確かにそうだなあ」

ソフィに言われてそう思ってしまった。封印の塔が簡単に見つかるわけがない。レストアで準備はしてきたけど、そう何日も砂漠にいられる量もない。さて、どうするかと悩んでいると、

『確かデザートラビリンズのどこかにオアシスと呼ばれる所があったはずですよ』

レイディアントが俺達に言ってきた。

「何でそんなこと知ってるんだ？」

『バニツシュが聞き込みをしている時、私もいろんな人が話しているのを聞いていたので、その時に聞こえたんですよ』

「なら、とりあえずはオアシスを探そうよ。何か塔について分かるかも知れないし」

ソフィがそう言って、

『そうですね。もしかしたら人がいるかも知れません』

とレイディアントも言ったので、

「じゃあ、とりあえずデザートラビリスについたらオアシスを探すか」

俺はそう提案した。

ソフィとレイディアントも同意したので、俺達はまずオアシスを探すことにした。

酒場で聞いたようにレストアからずっと東に進むといきなり砂漠地帯が見えた。今まで緑のある所から急に砂漠地帯になっていた。

「ここが．．．デザートラビリス」

俺は、そう言っつて砂漠の中に足を踏み入れると、急に地鳴りがした。

「な、何だ!？」

倒れないように必死に踏ん張りながら、周りを見渡した。

「バニツシュ、あれ．．．」

ソフィが指差す方を見ると、そこにはでかい何かがあった。言うなら、ミニズが巨大化したような奴だ。

「な、何だ。こいつ？」

『あれは砂漠に棲みついているサンドワームです。本来こんなところではなく、もっと奥の方に棲んでいるはずなのに．．．』

「なら、どうしてこんな所にいるんだよ？」

『分かりませんが、とりあえずサンドワームを倒さなくては、先に進むことは出来そうにないですよ』

レイディアントが言い終わるやいなや、サンドワームが俺達に突っ込んできた。

「チッ、ソフィ横に避けて！」

ソフィに指示を出して俺も間一髪避けることができた。

「くそっ、やるしかないか。ソフィ大丈夫か？」

「ええ、私は大丈夫だよ」

「なら、援護を頼む」

「任せて！」

ソフィが言うのを確認して、

「いくぞ！レイディアント」

『了解です』

レイディアントに言って、力を解放する。

「レイディアントの力の40%を解放」

そう言い、光の力で刀身が輝き、身体が強化される。

「いくぞ！！」

その声を出して俺達はサンドワームと対峙した。

俺はサンドワームとの距離を詰めるべく、砂漠を駆けた。通常なら砂漠の砂に足を取られるが、身体強化をした今それは全く気にならない。

サンドワームとの距離を一瞬で詰め、鞘から刀を抜き放つ一閃、

「ハッ」

気合と共に放たれた一閃をサンドワームは難なく避けた。

「くそっ、こいつ中々動きが速い」

悪態をついていると、サンドワームは俺に向かって突進してきた。俺はそれをかわして、かわし様に斬りつける。

ブシュ

とサンドワームの首の辺りから鮮血が飛び出す。斬りが浅かったため致命傷にならなかった。

「バニツシュ、避けて！！」

俺はソフィの声を聞いてサンドワームから距離をとる。すると、

「我、今海の精ネレイドの力を借りる。無数の水の槍よ。相手を貫け」

アクアランス



俺はさらにレイディアントの力を解放する。

『駄目です、バニツシュ。これ以上の力の解放は体に負担になります』

レイディアントの忠告を無視し、俺は50%まで引き上げる。

サンドワームが突っ込んで来るが、俺はそれを正面から受け止めた。これには、サンドワームも驚いたようで少し怯んだ。その隙を見逃さず、

「死ね!!この野郎!!」

と力いっぱい刀を頭めがけて振り落とした。

ブシュアー

と大量の血が吹き出し、サンドワームは絶命した。

「はあはあ」

荒い息をついて今度こそ終わったことを確認してからソフィの所に急いでいった。

「大丈夫か?ソフィ」

俺が声をかけると

「んっ...バニ...シュ」

微かだが意識がありホッとした。

「よかった。ごめん、ソフィ守れなくて...」

「大丈夫だよ、バニツシュ。これくらい何でもないから」

そう言っただち上がった。

『ソフィには悪いですが、そろそろ行きましょう。いつまでもこんなところにいるのも何も出来ません。とりあえず、オアシスを探しましょう』

レイディアントがそう言ったので、俺はカチンときて、

「おい!ちよっと待てよレイディアント。今ソフィは起き上がったばかりだろ。そんな急に...」

そういう前にソフィが、

「大丈夫、本当に大丈夫だからバニツシュ。今はレイディアントの言う通りオアシスを探しに行こ」

そう言ったので、分かったとしぶしぶうなずいた。

とりあえず、サンドワームを倒した俺達はデザートラビリンスを歩き回ってオアシスを探していた。かれこれ、サンドワームと戦ってから二、三時間が経っていた。ただでさえ、戦い疲れが溜まっているのに、砂漠なのでとても暑く体力がどんどんなくなっていく。「はあはあ、オアシスってどこにあるんだよ」

俺は何度口にしたか分からない言葉を言った。水分補給のために水を飲んだ。

「ソフィも飲んでけよ」

そう言っソフィに渡す。

「ありがとう」

と言いながらソフィも水を飲む。

「はあ、いつになったらオアシスに着くんだよレイディアント。場所とか分からないのか？」

『私も場所までは知りませよ。それにしても困りましたね。このままでは私達、この砂漠で死んじゃいますよ』

そんな不吉なこと言っなよと心の中で思いながらソフィに話しかけた。

「ソフィ、だいじょうぶか？」

「もう大丈夫だってば。バニツシュは心配性だね。傷も大したことないから」

「そうか。でも、辛くなったら言っんだぞ」

「うん。ありがとね。気を遣っってくれて」

そんなやり取りをしながらオアシスを探し回った。

「さ、さすがにもうだめだ・・・」

俺はもう倒れる寸前だった。すでにレストアで買っおいた水が

なくなっていた。喉が渴いた。水、水が飲みたい。そんなことを考えていた。ソフィを見ると同じように辛そうだった。

あつ、ヤベエ。目の前が揺れてきた。イカン、イカンしつかり意識を保とうと頬を叩いて気を引き締める。

「そろそろ見つからないと．．．限界かも．．．」

「そう．．．だな」

と言っていると、レイディアントが急に、

『バニツシュ、ソフィがんばってください。多分ですが、水が溜まっている場所が近くにありますが。おそらく、オアシスでしょう』

「なんでそんなこと分かるんだ？」

『分かりませんが、そんな感じがするんです。さあ行きましょう』  
そう言つて、レイディアントに指示される方へ向かっていった。

少し歩くとそこには砂漠地帯にもかかわらず、緑があり、水が溜まっていた。

「やった。やつと着いたぞ」

俺が言つと、

『ほらあ、言つたとおりでしょう。感謝してくださいよ』

何て言っていたが、俺の耳には届いていなかった。

ソフィと俺はオアシスに入り、水を飲んで喉を潤した。

「はあく生き返つた」

ソフィはホツとしながらそう言つた。

「水がここまでうまいと思つたのは初めてだな」

『しかし、今日はこれ以上進めませんね』

レイディアントがそう言つた。確かに日が傾きはじめていて、そろそろ辺りが暗くなるからだ。

「仕方ないし、今日はここで体を休めて、明日出発することにな  
いか？」

「そうだね。そうしよ。私くたくただよ」

ソフィもうなずいたので、俺達はオアシスに簡易式のテントを張ることにした。

レストランで買った食糧を食べながら、明日どうするかを話し合った。

「明日には封印の塔に着きたいな」

俺の言葉に、

「そうだね」

とソフィがうなずいた。

『封印の塔の近くまで行くと私に分かるので、とにかく明日になって探すしかないですね』

「レイディアント、封印の塔の場所が分かるのか？」

『近づくとも封印の塔があるとは分かりません。まあ、封印したの私ですからな』

「そっか〜なら、明日は案外早く見つかるかもしれないね」

ソフィが言ったので、そうだなと返した。

そろそろ眠くなってきたなと思い、

「ソフィ、そろそろ休まないか？つかれたろ？」

「そうだね。明日もあるし、今日はもう休もうか」

そう言っつて、テントに入って、

「おやすみ、バニッシュ」

「ああ、おやすみ」

俺達は眠りについた。

## 砂漠のオアシス（後書き）

どうでしたでしょうか？相変わらず文章書くの下手だな〜なんと  
かうまくなりたいたい・・・

次の更新は早くできるかな〜テストも終わるんで・・・  
では、感想待ってます。

## 封印の塔・地の塔・（前書き）

どうも〜残月です。久々の投稿になります。

なんとか自動車学校も終わったので、これからまた小説を書いていきたいと思います。

では、どうぞ〜

## 封印の塔・地の塔・

夜のデザートラビリンスを歩く人がいた。暗くてよく分からないがおそらく男だろう。背中には布で包まれた巨大な剣のようなものを携えていた。

突然、男の周りにマッドウルフの群れが現れた。どうやら歩き回っている内にマッドウルフの棲みかに足を踏み入れたようだ。マツドウルフとは、砂漠に生息していて集団で獲物を襲う凶暴な魔物だ。男はマッドウルフに取り囲まれた。普通の人ならば慌てるだろうが、その男は落ち着いていた。

「ハア、全くあのお方も面倒な仕事をオレに頼んだもんだぜ．．．」  
独り言のように呟いてから背中の中を手に取った。男が布を取り払うとそこには黒く輝く大剣があった。それと同時にマッドウルフが飛び掛ってきた。

「まあ、お前らに怨みはないが、向かってくるなら仕方ねえ」

そう言っ、男は大剣を一回大きく振った。その一撃で向かってきたマッドウルフの群れを絶命させた。

「さてと、さっさと仕事を終わらせようかね」

そう言っ、男は何事も無かったかのように剣に付いた血を払い再びデザートラビリンスの奥に消えて行った。

『起きてください、バニツシュ。朝ですよ』

「ふああ〜おはよう、レイディアント」

大きなあくびをしながらレイディアントに言った。

「ソフィはもう起きてるの？」

『もうとつくに起きていますよ。バニツシュも早く出発の準備をしてください』

「分かったよ」と言いながらテントを出た。外に出て出発の準備をする。今日は、封印の塔に行かなくてはならないしちゃんとして

かないとな。そう思いながら準備をしていると、

「おはよう、バニツシュ。朝ごはんは食べた？」

とソフィが声をかけてきた。

「ああ、おはよう。朝はまだ食べてないな。ソフィは？」

「私もまだだよ。今準備が終わったところだから」

「そっか。わかった。俺もこの準備が終わったら食べるよ」

「了解くじゃあ、待ってるね」

俺はさっさと準備をして、朝食を食べた。

「朝食も食ったことだし、そろそろ出発するか」

とソフィに声をかけた。

「そうだね。早く行かないと日が暮れるかもしれないし」

ソフィも大丈夫そうだし出発するか。と俺達はオアシスから出ようとした時、ソフィが

「待って!!」と言った。

「どうした？」

俺が、ソフィに聞くと、

「あそこに人が倒れてる・・・助けないと!!」

ソフィの言った方を見ると、背中に布で包まれた巨大なものを背負った男が倒れていた。

「おい!あんだ大丈夫か？」

俺達は急いで倒れている男に駆け寄った。

「うう・・・み、みず・・・を・・・」

「水か?ちよつと待ってる!」

俺は水の入った入れ物を倒れている男に渡した。

「す、すまん。恩にきる」

そう言つて、男はものすごい勢いで水を飲んだ。

「ふう〜、生き返った〜。ありがとな。あんたらに借りが出来ちまったな」

空になった入れ物を俺に返しながら男が言った。

「そういや、まだ自己紹介をしてなかったな。オレの名前はジャック、ジャック・エンハンスだ」

「俺はバニツシュだ」

「私はソフィアです」

「バニツシュにソフィアか。いや、本当に助かった、ありがとう」

「いや、気にするなよ。それよりもジャック、あんた旅人か何か？」

俺が聞いてみると、

「ああ、オレは狩人だ。どんな病にも効くバジリスクのウロコを取りに、この砂漠の奥の方まで行って来たんだが、帰りに迷っちゃまったな。それで何とかここにたどり着いて、力尽きたわけさ」

「砂漠の奥の方まで行ってきたんですか!？」

ソフィアが聞くと、

「ああ、そうさ。バジリスクのウロコは、奥の方じゃなきゃ取れないからな」

「なら、奥に行った時に塔を見ませんでしたか？」

「塔ねえ」

ジャックは少し考えて、ああ、と手を打った。

「そういやあったな。その塔がどうかしたのか？」

「実は・・・」

俺はこれからその塔に用があるのだが、場所が分からなくて困っていることを伝えた。

「というわけなんだが、行き方とか分からないか？」

俺はジャックに聞いてみた。

「ん、要はお前ら塔に行きたいんだろ？なら、さっきのこともあるしオレが案内してやるよ」

「本当か!？」

「ああ、さっきの借りを返したいと思ってたからな」

「助かるよ。ありがとう」

「ありがとうございます」

俺とソフィはジャックに礼を言った。

「いいってことよ。なら、早く出発しようかね」

「そうだな。行くでしょう」

俺たちはオアシスを後にした。

オアシスを出る前にレイディアントが念話で俺に話しかけてきた。

(バニツシュ)

(どうしたんだレイディアント。念話で話すなんて珍しいな)

(いえ、普通に刀としゃべっている人がいたら、私達の間係を知らない人からしたら変人と思われますよ。それよりもあのジャックという男．．用心したほうがいいかもしれません)

(どうしたんだ？急に)

(いえ、なんとなく嫌な予感がするので．．)

(ふうん。俺からは悪い奴には見えないけどな)

(まあ、一応用心しててください)

(分かったよ)

「おい、バニツシュ。早く行くよ」

ソフィに呼ばれたので俺はレイディアントとの念話を中断して、オアシスを出発した。

オアシスを出て俺たちは、デザートラビリンスの奥の方を歩いていった。

「そういえば、どうやって塔の場所に行くんだ？この砂漠の奥はコンパスは使えないだろ？」

ジャックに聞くと、

「ああ、知ってるさ。こいつを使うんだ」

そう言っつて、ポケットから取り出したのは、少し大きい木の枝の先を尖らせたものだった。

「何だそれ？」

「これは、魔法のかかったコンパスさ」

「魔法がかかった？」

「ああ、このコンパスの上の部分は開くようになっていて、そこに行きたい場所の物を入れるんだ。すると、このコンパスは自動的にその場所を指すんだ」

「へえ〜でも塔にある物をなんか持っているのか？」

「ああ、俺が偶然塔を見つけた時、珍しい石があったからな。それを取ってきたんだ。それを使えばいい」

そう言つて、ポケットから青く光る石を取り出した。

「わあ〜きれいですね」

「だろ。で、これをコンパスの上の部分に入れてつと・・・」

青く光る石をコンパスに入れると、急にコンパスがジャックの手のひらの上で回りだした。そして、ある方向に向かってコンパスの針が指し示した。

「こつちの方にオレが見た塔があるようだな」

「よしっ！方向も分かつたし先に進もう！！」

「「おう！！」」

俺たちはコンパスの指す方向に向かって歩き始めた。

デザートラビリンスの奥の方を歩いていた俺たちは休憩を挟みながら塔の場所を目指していた。

俺はデザートラビリンスを歩いていて一つ気がかりなことがあった。魔物との遭遇が異様に少ないことだ。レイディアントも俺と同じことを思ったのか念話で俺に話しかけてきた。

（バニツシユ。あまりにも魔物がいないと思いませんか？）

（ああ、俺も思っていた所だ。もうかなり奥の方まで来たのに襲ってきた魔物はオオカミっぽい魔物の群れぐらいだからな・・・）

（何か嫌な予感がします。気をつけてください）

（了解。気をつけていくよ）

そう言つて、レイディアントとの念話を終了した。

すると、ソフィが、

「あっ！！！！」

と声を上げた。

「どうしたんだ？ソフィ」

「とうとう封印の塔に着いたみたいだよ」

ソフィが見ている方を向くと、そこには四階くらいありそうな石造りの塔があった。

レイディアントが俺に念話で話しかけてきた。

（ここが封印の塔・地の塔・ですね）

（ここがそうなのか？）

（ええ、間違いありません。この中に鍵のかけらがあります）

俺はレイディアントから聞いたことを二人に話した。

「どうやらここが俺達の目的の場所のようだ」

「うん。やっと着いたね」

ソフィが伸びをしながら言った。

「ジャック、ありがとな。あんたがいなかったらここにたどり着けなかったよ」

「いやいや、気にすんなよ。助けてもらったお礼さ。ところで中に入らないか？」

「そうだな・・・って、ジャックも付いて来るのか！？」

俺が驚いたようにいうと、

「そりゃそうだよ。ここまで来て、オレだけ帰るわとかそういうわけにはいかないだろ？何、足手まといにはならないさ」

そう言ってきたので、

「分かった。よろしく頼むよ」

「こちらこそ」

「よし、じゃあ塔の中に入ろうか」

俺達は、塔の中に足を踏み入れた。塔の中は真っ暗だった。なので、俺はレストアで買ったランプを取り出した。このランプも魔法がかかっており永久に消えないものである。

ランプの明かりによって、塔の中を見渡すことが出来た。中は広く、俺達三人が並んで歩けるくらいの幅の通路になっていた。

「思ったより、早く目的の物の所に辿り着きそうだな」  
「そうだね。見た感じ道なりに沿って行けばいいみたいだね」  
「なら、先に行くとしてようぜ」  
俺達は慎重に塔の一階を進んで行った。

思ったとおり、一階は通路に沿って進めばよかったので、すぐに二階へ上がる階段を見つけた。

俺達が二階に上がるとかなり広い部屋に出た。

「かなり広い場所に出たな．．．」

俺がそう言うと、ジャックが、

「奥に扉があるようだぜ」

そう言って、進もうとすると突然、塔が揺れた。

「きゃあああ」

ソフィが小さい悲鳴を上げた。

「ソフィ大丈夫か！」

俺は、ソフィのそばに行って手を貸した。

少ししたら揺れが収まった。

「たくつ、何だったんだ？」

「おい．．．バニツシュ。やばいぞ」

とジャックが言ったので、

「どうしたんだ？」

俺はジャックの方を見た。そこには、岩でできた魔物が二体いた。

「な、何だこいつは．．．」

俺が言うと、

「こいつはストーンゴーレムだ。砂漠に棲んでいる魔物さ」

ジャックが答えた。

「何か、あの二体が邪魔で奥の扉に行けそうにないんだけど．．．」

ソフィがそんなことを言ったので、

「仕方ない。あの二体を倒してさっさと奥の扉にいくぞ！！二人とも準備はいいか？」

「いつでもいいよ」

「オレも大丈夫だぜ」

「よし、じゃあ行くぞ。ソフィは援護してくれ。俺とジャックで攻める」

「了解」

そう言っつて、俺達はストーンゴーレムと対峙した。

「レイディアントの力の40%を解放！」

すると、いつものように身体が強化され、刀身が光を帯びた。

レイディアントが、

『バニツシュ、くれぐれも解放しすぎないようにしてください。身体に負担がかかりますから』

「分かってるよ」

そう言っつて、俺はストーンゴーレムに向かって走り出した。

「はあああつ」

鞘から剣を抜き斬りかかる

ガキン

という音と共に剣が弾かれた。

「チツ、見た目通り硬いな。全く何で俺と戦う魔物はこんなに硬いんだよ。作者は何考えてんだ？」

『何を言っているんですか？バニツシュ』

「何でもねえよ・・・つと」

レイディアントにそう答えて俺はストーンゴーレムの攻撃をバツクステップで避けた。俺がさっきいた場所にはクレーターが出来上がっていた。

「あれを一発でもくらうとやばいな」

いくら身体が強化されているとはいえ、あんなのくらったら命がない。その時、

「バニツシュ、危ない!!」

とソフィの声が聞こえた。

振り向くともう一体のストーンゴーレムが攻撃をしかけていた。

「っ!しまった」

まだ、俺は最初に避けた攻撃から体勢を立て直せていなかった。当たるとそう思った時、

「オレがいることを忘れてもらっちゃあ困るぜ」

と声が聞こえて、ストーンゴーレムの攻撃を受け止めた。

「ジャックか．．助かった。サンキューな」

「いってことよ」

ジャックは手に黒く輝く大剣を持っていた。

「おらあああ!!」

とストーンゴーレムを押し返した。

「バニツシュ、こっちのストーンゴーレムは俺に任せろ」

「了解。俺はもう一体をやる」

そう言っつて、俺はストーンゴーレムに向き直った。

「剣が効かないなら魔法で攻撃するまでだ」

「我、右腕に宿りし光龍の力よ。敵を貫く無数の刃よ現れる」

詠唱を唱えて俺の周りに光の剣を無数に出した。普段は魔法を使うことができないが、レイディアントの力を解放している間は光魔法を使うことができる。

「ソフィ、こっちはまだ大丈夫だから、ジャックの方を援護してくれ」

「分かったわ」

ソフィが答えたのを確認して、

「いけっ!!光の刃よ」

そう言っつた瞬間、俺の周りにあった光の刃がストーンゴーレムに向かって飛び出した。無数の光の刃を浴びたストーンゴーレムが悲鳴を上げた。

「ブロロロオオオー」

さらに、体に纏っていた石も砕け散り、やわらかい肉質の部分があらわになった。

「そこだ!!!」

俺はストーンゴーレムが怯んだのを見逃さずに攻撃に出た。

抜刀術 - 閃光 -

ストーンゴーレムとの距離を一気に詰め斬り抜いた。

ザシュン、ブシューアアア

とストーンゴーレムから血が吹き出した。が、まだ死んでいないようでふらふらしていた。

「トドメだああ」

俺は今斬りつけた所をもう一度斬りつけた。

そうして、ストーンゴーレムは絶命した。ジャックの方に向かうと身体を向けると、ちょうどジャックの方も倒し終わったようだった。

「ふう〜お疲れ、ジャック」

「ああ、そつちもな。ソフィアが手伝ってくれたおかげで楽に倒せたぜ。ありがとうさん」

「いえ、ジャックさん一人でも十分押してたから私はほんの少し手伝っただけです」

「まあ、ソフィもおつかれ」

「バニツシユもね」

そう言っつて、俺達は奥の扉に入り先に進んだ。

二階から三階へ上がる階段を上がりながら俺はジャックに聞いてみた。

「そついえば、さっきジャックが使っていた剣珍しかったな。黒い

大剣なんて始めて見た」

「まあ、そうだろうな。ここら辺にはない素材を使ってるからな」

「へえ、どんな素材なんだ？」

「黒曜石という石を使っているんだ」

「ふん」

「それはそうと、お前の剣も変わってたじゃねえか。それに光魔法なんて見たことないぞ」

と今度は逆にジャックが聞いてきた。

「まあ、それはあれだな。主人公設定で主人公はこいつというのがあった方がいいだろうっていう作者の考えだな」

と暈しておいた。

そんな話をしながら俺達は三階に進んでいった。

それから特に魔物が出ることなく順調に最上階まで辿り着くことができた。

「ちょっと待て！！あまりにも早く着きすぎだろ？」

「仕方ないよ。二階での戦闘シーンでかなりかかったから・・・作者としては早く話を進めたいんだよ」

「それはなんか色々ダメだろ・・・この小説大丈夫なのか？」

と俺とソフィが話していると、ジャックが「二人は何を話しているんだ？」と聞いてきた。

「まあ、色々と・・・」

そう言葉を濁しておいた。

とりあえず俺達は今最上階の扉の前にいる。

「ここにかけるがあるんだな？」

『ええ、そのはずですよ』

「じゃあ開くぞ」

「うん」

「ああ」

そう言って、俺は扉を開けた。

その部屋の台座に光り輝くかけらがあった。

「これか・・・」

俺がそのかけらを手に取った。その時、

ズバァァン

と斬撃が放たれた。

「っ!!!」

俺はそれに気付きソフィの手を取って避けた。何なんだと思つて斬撃がきた方を見ると、そこには黒く輝く大剣を持ったジャックの姿があつた。

封印の塔・地の塔・（後書き）

どうでしたでしょうか？相変わらず文章が下手ですが・・・  
最後の方はあまり気になさらないでください。

誤字・脱字、文章のおかしなところがあれば教えてください。

では、では

## ジャックの正体（前書き）

どうも、残月です。やっと更新できました。  
最近、とても忙しいのです。

では、どうぞ〜

## ジャックの正体

「何をするんだ、ジャック!!」

俺はジャックに向かって叫んだ。

「ほお、今のを避けたか．．．不意をついたつもりだったんだがな」と少し驚いたような口調で言った。

そんなジャックに俺は、

「答えるよ!!」

と強い口調で言った。

「何をしたかって？ちよつとあんたらがどれくらい出来るのかわ知りたくてな。だから、試させてもらった」

「くっ．．．何のために？」

「何のためについて言われても、オレはあのお方からそういう命令を言いつけられたから」

「あのお方って誰のことだよ」

「そりやお前、あのお方っていったら閻龍ヨルムガンド様だけど？」

「「なっ．．．」」

その名を聞いたとたん俺とソフィは絶句した。

「それじゃあまあ説明はこれくらいでいいか？じゃあ、いくぞ!!」  
そう言って、ジャックはこちらに向かって走り出した。

「チッ．．．ソフィ、後ろに下がって！」

ソフィに言って、俺は剣を構える。

「レイディアントの力の40%を解放！」

『バニツシュ、気をつけてください』

「分かってる」

レイディアントにそう答えて、ジャックの方を向く。いつもなら  
先手必勝で相手との距離を詰めるが、今回は相手の出方を伺う。大  
剣なら読むことはた易い、縦に振り下ろすか横になぎ払うかの2択  
だからだ。だからまず、相手の動きを見切る。ジャックの攻撃は大

剣は大剣を俺に目掛けて振り下ろす。

それを俺は横に避けて、ジャックの隙を付き斬りかかる。

「ここだ！」

そう言つて、剣で斬ろうとするが、

「甘いな!!」

と言つて、ジャックが大剣を振り下ろしている途中から横なぎに変えて攻撃してくる。

「なっ……」

俺はその攻撃を剣でガードするが、大剣の衝撃に耐え切れずに吹き飛ばされる。

ドガアアアン

という音がして、俺は壁に叩きつけられた。

「くっ……」

「ハハハっ、まだまだいくぞ!!」

という声がして俺に向かってくる。「まずい!」と思つて、体勢を立て直そうとするが、強く叩きつけられたせいで思うように体が動かない。その時、

「我、今海の精ネレイドの力を借りる。無数の水の槍よ敵を貫け」

アクアランス

と詠唱を唱える。俺の目の前に魔法陣が展開し、そこから無数の水の槍がジャックに向かって放たれる。

「チッ……」

と言つて、ジャックは攻撃を中止して大剣でガードする。

その間にソフィが「大丈夫?」と言つて助け起こしてくれる。

「悪い、ソフィ。助かった」

とソフィに言った。

「私があいつの隙をつくるよ」

「分かった。頼むよ」

俺はソフィに任せた。

「よしっ!!」

とソフィが言っただけで、気合を入れて詠唱を開始する。

「我、今海の女神レウユラアの力を借りる。水の壁よ敵の攻撃を防げ」

アクアシールド

そう唱えて、ジャックの周りに4つの水の壁が現れる。

「?ソフィ何をしてるんだ?」

俺の問いかけにソフィは「見てて」と言った。

「我、今海の精ネレイドの力を借りる。敵を貫く巨大な槍よ現れる」  
アクアラランサー

唱え終わるとジャックの周りの水の壁から巨大な水の槍が現れた。それらがジャックに襲い掛かる。「チツ...」

そう言っただけで、ジャックは大剣を横に一回転に振り回す。それで水の槍を砕いた。

「バニツシュ、今だよ」

とソフィの言葉に俺は、

「ああ!!」

と言っただけで、ジャックに向かって走る。

「ハアアアアア」

抜刀術―閃光―

ズバアアアアア

ジャックの脇腹を切り裂く。ジャックが「ぐっ……」と呻いた。  
「よしっ！手ごたえあり」

俺はそう言っただけの方を見て言った。

「もう、あきらめろ。そんだけ傷を負ってたらもう動けないだろ？  
降参しろよ」

俺の言葉に対してジャックは、

「ククク……ハーハツハツハツハ」と笑い出した。

「……何がおかしいんだ？」

「いや、何。これくらい傷で敵に降参を求めたりするなんて、あまりにも甘いねえ。馬鹿にされたもんだ」

そう言っただけ、ジャックは自分の傷ついた脇腹に向かって大剣を向けた。

「何をやる気だ？」

俺が聞くと、「こうするのさ」と言っただけ、自分の大剣を脇腹に刺した。

「……なっ……!!」

俺とソフィが驚いていると、

「見せてやるよ……オレの真の力をな」  
そう言っただけ、

「オレの血を吸い高まれ！解放!!」

そのとたん、大剣がジャックの血を吸っていく。すると、大剣の形状が徐々に変化していく。そこには、真っ赤な色の十字架のような形になっていた。

「血塗れた剣ーブラッド・クロスー」

そうジャックが言った。

「な、何だ？」

俺がそう言っただけ、

「これが真の力だよ。この大剣はオレの血を吸うことにより形状を

変化させ、魔力も上げる」

確かに、さっきとは比べ物にならない量の魔力だった。

「それじゃさっそく、この力を見せてやるよ」

そう言うと、ジャックはまだ血が出ている脇腹に手を当てて、左手に血をつける。それをソフィに向けた。

俺は何か危ないと感じ、

「逃げろ！ソフィ！！」

と言うがそれに

「遅いよ」

そう言って、ジャックが言葉を発する。

#### 闇魔法発動ーブラッドランスー

するとジャックの左手から血のように赤いソフィに向かって飛び出す。ソフィはそれに、

「我、今海の女神レウユラアの力を借りる。敵の攻撃を防ぐ水の槍よ、現れる」

#### アクアシールド

と水の壁を出現させるが、

「無駄だ」

そう言って、ジャックが放った槍はあっさりとソフィの水の壁を貫きソフィに当たる。

「かはっ」

そう聞こえて、ソフィは壁に叩きつけられた。

「ソフィーーーーー！！」

「ハッハッハッ、これがオレとあんたらの力の差だよ」

「くっ、てめえ・・・許さねえ！！レイディアントさらにもっ10%解放する！！！！」

そう言うと、レイディアントが、  
『仕方ないですね。でも無理はしないでください』

「ああ」

そして俺はレイディアントの力を解放する。

「レイディアントの力の50%解放!!」

すると、一段と刀身の輝きが強くなる。

「いくぞ!!」

そう言って、ジャックに構えをとる。

「来てみる」

「はああああっ!!」

俺はジャックに向かって走り出す。

「ふっ．．．突っ込んでくるだけか」

左手を俺の方へ向け魔法を使う。

### 闇魔法発動ーブラッドランスー

ソフィを襲った槍が俺に向かって飛んでくる。俺はそれを避けようとせずにそのままジャック目掛けて走る。

それにジャックが、

「馬鹿な、何故避けない」

ジャックが放った槍が俺の身体を貫く。それで終わりだったが、俺の体が消える。

「何!?!」

ジャックが驚きの声を上げる。

「甘いんだよ。今、あんたが放った槍は俺の残像に当たったんだよ!!」

「チツ．．．ならこれならどうだ」

そうジャックが言って、持っている剣を地面に突き刺す。

「くらえ」

すると、地面に魔法陣が出てきて、そこから先ほどの槍が無数に

出てくる。だが、その槍も俺には当たらない。全て残像に当たる。

「くそっ！」

ジャックが声を上げる。そして俺は残像を残しながら移動し、ジャックの懐に潜る。

「チィ．．．」

「トドメだー！」

抜刀術―天照―

足を曲げてバネのようにして跳び鞘から剣を抜いて切り上げる。

ザシューー

ジャックを斬るが少し避けられていて、致命傷にはならなかった。

「くそっ．．．」

とそこで俺は地面に着地すると同時にジャックに追撃を加えようとするが、足に力が入らず膝をつく。

「くっ．．．体が動かない」

『無理な動きをしたために体に負担が多かったんです』

と言うレイディアントの言葉に、

「ちくしょおおお．．．もう少しなのに」

と俺は呻く。

「くっくっく、今のは少し危なかった。何とか避けれたがな。まさか、力を少し上げただけでここまで違うとは驚きだ」

そんなことを言うてくるが、俺は何も答えない。

「まあ、これでオレの仕事は終わりかな。そろそろ時間だし」

と言いつと、

「おっ、ちようどいいや。ああ、ちゃんと仕事はしたさ。．．分かった。すぐ戻る」

と何か独り言のようにつぶやいていて、

「何を．．．言って．．．」

『おそろく念話でしょう』

とレイディアントが答えてくれる。

「まあ、オレの仕事はさつきも言った通り終わりだ。別にお前らを殺すわけじゃないからな」

そう言っつて、去ろうとするジャックに

「ま、待て！！」

と声を振り絞っつて言う。  
すると、

「ああ、そうだ。今回は見逃すが、次からはそのカケラを奪いにくるぜ。今のままじゃ、あんたはオレの仲間にも勝てないだろうなあ。まあ、がんばれよ」

そんなことを言っつて、ジャックを闇が包んだかと思うとそこにジャックの姿は無かった。

「くそっ．．．」

俺は気を失った。

場所は変わっつて、ある建物の中で

「ふう〜帰ったぜ〜」

「ごくろうだったな。光龍を宿し者はどうだった」

「まあ、そこそこだな」

「そうか。分かった。闇龍様には俺が報告しようお前は休んでおけ」  
「了解」

そんなやり取りをした後、2人の男は消えた。

再び場所は地の塔に戻る

「．．．っ」

俺は目を覚ました。体の節々が痛いのが気にしていられない。

「ジャックは．．．」

『おそろく闇龍の所に戻ったのでしょっ』

「レイディアント．．．っ．．．ソフィは!?!」

俺はソフィが倒れているところまで行く。どうやら気を失っているだけで命に別状は無いようだった。

「よかった．．．」

俺はホッと安心した。すると、

「ん．．．」

と言ってソフィが目を開けた。

「ソフィ!?!」

「バニ．．．シュ．．．私は．．．あっあいつ、ジャックは？」

と聞いてきたので、

「悪い、逃がした．．．」

と俺は答えた。

「そっか．．．あつ、カケラは？」

ソフィの問いに、

「カケラは大丈夫だ」

「ならよかったよ」

と安堵したように言った。

『とりあえず、そろそろ出ませんか。休むのも外に出た方がいいでしょう』

レイディアントの提案に俺は「そうだな」と言った。

「ソフィ、立てる？」

ソフィに聞いてみる。

「うん、大丈夫だよ」

そう言って、ソフィは立ち上がる。

そうして俺達は地の塔を出た。

外に出て一つ大変なことに気付いた。

「そういえば、ここの砂漠からどうやって次のカケラのある塔まで行くんだ？」

「あ．．．」

戦いで忘れていたが、この砂漠を出るためには相当苦勞するのだ。

「レイディアントは何かいい手はないか？」

『………思いつきませんね』

とあっさり言ってきた。「少しは考えてくれよ」と言いながらどうしようかと悩む。すると、手に持っていたカケラが光りだした。

「な、何だ？」

と驚いているとその光が細い線のようになってある方向を指し示した。

「もしかして……この先に次の塔のカケラがあるとか？」

『そうかもしれないね』

とレイディアントが答えた。

「まあ、とりあえずこの光が指している方向に進んでみようよ」

ソフィが言ったので、俺は

「そつだな」

と言いながらその光が指している方向へ歩き出した。

## ジャックの正体（後書き）

どうでしたでしょうか？誤字・脱字などがありましたら教えてください。

それから、これからは不定期更新になります。

それでは、ちえりお!!

## 峠を越えて（前書き）

どうも残月です。やっと投稿できました。

いくらなんでも空けすぎた気がします。そういえば、この小説をお気に入り登録して下さいの方々、ありがとうございます。作者感激です。

これからもがんばっていききたいと思います。

では、どうぞ〜

## 峠を越えて

「はあ、はあ、あ、暑い．．．」

俺はそう言いながらデザートラビリスを歩いてた。

ついさつきまで、闇龍ヨルムガンドに仕えている一人ジャック・エンハンスと戦い終わったばかりだった。それから地の塔から出てカケラの光が指す方向に歩いている。

『大丈夫ですか？バニツシュ』

レイディアントが聞いてくる。

「身体の節々が痛いよ．．．」

『私の力を無理に解放したからですね。無理しないようにと言ったのに』

「仕方ないだろ。ああでもしなくちゃジャックを退けることなんてできなかつたし」

『まあ、それでも敵いませんでしたけどね』

「ぐっ．．．そうだけど．．．。あんな奴らが後四人もいるのか．．．」

今回の戦闘はジャックが見逃してくれたから何とかなつたけど、次からはそうはいかない。次の塔に着くまでに何とかして力をつけないとなと思っっていると、

「バニツシュ、大丈夫？」

とソフィが心配そうに聞いてきた。

「あ、ああ大丈夫だよ」

「本当に？何だか辛そうなんだけど．．．」

「はは、この暑さが結構厳しいからね」

とソフィに言っておいた。「そうだね」とソフィも言って再び歩き出す。

ソフィには知られたくないなあ。ソフィを守るようになるためにもやっぱり力をつけないとなつと俺は決心した。

しばらく歩いてみると看板が立ててあった。長い間放置されていたのか、かすれて読みにくかったがこう書かれていた。

　　水の都　セイレーンへ続く峠

「やっと、砂漠から出ることができなのか」

それだけで俺はうれしくなった。もう砂漠はこりこりだ。

それにソフィが、

「この峠を越えると次は水の都に着くんだね。そこに次の塔があるのかな？」

『それは分かりませんが、とりあえず早くこの砂漠から出たいですね。それに水の都はともきれいな所ですから』

レイディアントがそう言ったので、

「レイディアントって、水の都に行ったことあるのか？」

と俺は聞いてみた。

『ええ、昔ですけどね。海に面しているので貿易が盛んな所ですよ』

レイディアントが答えたので、

「楽しみだなあ」

俺はそう言いながら砂漠を抜け出し、峠を登り始めた。

峠を上り始めた俺は感動していた。

「固い地面だ」

そんなことを呟くほどに。

『何を当たり前のことを言ってるんですか』

レイディアントにつっこまれたが、今は気にならない。

「仕方ないよ、レイディアント。だって、ここ最近ずっと砂漠にいたからバニッシュは嬉しいんだよ。まあ、私も少し安心してるけど」

ソフィがレイディアントにそう話した。

『まあ、はしゃぐのはいいんですけどね。さっきまでの疲れはどこ



放ってくる。

「しまった．．．」

そう思い目を瞑るが、

「させるか！！」

と言う声が聞こえた。目を開けると、光輝く剣を持った男の人が火球を切裂いた。

「えっ．．．」

驚いていると横から「大丈夫？」と言って、女の人が安全な場所まで運んでくれた。ウチはそこで気を失った。

俺達が頂上に着いた時には、一人の少女にワイバーンが放った火球が向かっているところだった。少女は動けないのか避けようとしていない。

「させるか！！」

俺は駆け出す。すると、

『バニツシュ、解放は30%までにしてください』

「分かった。レイディアントの力の30%を解放！」

レイディアントの力を解放して少女の前に立つ。そして、少女に向かっている火球を剣で切裂いた。切裂かれた火球は真っ二つになつて消滅する。

「ソフィ、今のうちにその子を安全な所へ！」

「分かったわ」

ソフィが安全な所へ移動したのを確認して、ワイバーンに向き直る。

「次は俺が相手だぁ！！」

そう言つて、ワイバーンとの距離を詰める。ワイバーンは火球を放ってくるが、避けながら距離を詰めていく。

「ハッ！」

と短く息を吐き、ワイバーンに向かって跳躍しそのまま切り抜く。

ズバァン                      ブシュユユウ

「グギヤアアアア」

やわらかい腹部から血が噴き出し、苦しそうに叫ぶ。ダメージが大きかったのか、地面に降りた。

「そろそろ終わりにしてやるよ!!」

身を低くし、地面を蹴って距離を詰める。ワイバーンもそれに対して火球を俺に向けて放つ。俺はそれを避けようともせずそのままワイバーンに向かって走る。そして一言、

「ソフィ!!」

と叫ぶ。すると「了解」と言う声が出て、詠唱を唱える声が聞こえる。

「我、今海の精ネレイドの力を借りる。水の球よ、我が手に集まれ」

アクアボール

と唱え終えて、ワイバーンが放った火球とソフィが出した水球がぶつかりどころも消失する。火球が消えて驚いたのかワイバーンに隙が生じる。

「くらえ!!」

抜刀術―閃光―

鞘から剣を抜き放つ一閃でワイバーンを切り抜く。それを受けワイバーンは血を噴き出して絶命した。

「ふう、終了っ」と

『お疲れ様でした。で、これからどうするんです?』

レイディアントが聞いてきたので、

「そっちなあ．．．とりあえずソフィの所に戻るか。あの子のことも気になるし」

『それじゃあ、戻りましょうか』  
「そうだな」

とうなずいて、ソフィの所に戻ることにした。

戻ってきた俺に気付いたソフィが「おつかれ〜大丈夫だった？」と少し心配そうに聞いてきたので、「ああ、全然余裕だったよ。なんせ、地の塔でのジャックの戦いに比べたら、そこら辺の魔物だったら倒しやすいさ」

「あはは．．．それもそうだねえ」

「それよりもその子は大丈夫なのか？」

俺はソフィの横で横になっている子を見て言った。

「うん、一応ケガの手当てはしておいたから、今は眠っているだけ」

「そうか。まあ、その子をほって峠を降りるわけにはいかないし。とりあえず休憩するか」

「それがいいね。はあ、お腹空いたな」

とソフィが言ったので、

「そういえば、地の塔を出てから水分補給しかしてないからな」

そう言いながら、俺は「そうだ」と言った。

「どうしたの？」

ソフィが不思議そうに聞くので、

「いや、さっき倒したワイバーンを焼いたら食えるんじゃない？」

そう言っつて、俺はさっき倒したワイバーンの所に戻り、火を起こしてワイバーンの肉を焼き始めた。

パチパチと少し離れた所から火が爆ぜる音がして、ウチは目を開けた。

「ん．．．ここは．．．」

まだ、ボオーとする頭で辺りを見回す。最初に空が見えた。それからどうしたんだっけ？と思っっていると記憶が戻ってきた。

「ああ！！そうだ。確かワイバーンと戦闘していて、それで火球が

当たって．．．」

と言って起き上がった。火球が当たったはずなのに体には傷一つついてなかった。

「??？」

なんでだろ?と思っていると、誰かが近づいてくる気配がした。

気配がする方向を見ると、腰まで届くくらいの金色の髪に、青い瞳をしている女の人が立っていた。その女の人がウチが目が覚めたことに気付くと安心したような顔で、

「よかつた。目を覚ましたんだ。体の調子はどう?大丈夫?」

と聞いてきて、

「えっと．．．」

急に聞かれたのでどう答えて言いか分からなくなり考えていると、「あつ、そうだ。バニツシュにも伝えなくちゃ。ちよつと待っててね」

と言って向こうに言ってしまった。

「あつ．．．ちよつと．．．」

呼び止めようとしたが遅かった。どうしたものかと考えていると再び女の人が戻ってきた。隣には光輝く剣を持った割とカッコいい男の人がいた。あ、髪の色は少し茶色がかっていて、瞳の色は金色だった。そして、

「ああ、目を覚ましたのか。大丈夫か?」

と聞いてきたので、

「えっと．．．はい。大丈夫です。えっと．．．」

名前を聞こうとしたら、先に女の人が「ああ!」と言って、

「そういえば、まだ自己紹介してなかったね。えと、私の名前はソフィア・エレクトラムっていうの。ソフィって呼んでね。で、こっちは．．．」

「バニツシュ・ローレルだ」

と自己紹介をしてくれたので、

「ウチはルシア・ハーヴェストって言うんです?」

「まあ、そんな無理に丁寧に言わなくてもいいぞ。普通に話してくれ。後、俺達のことと呼び捨てでいいからな」

そう言ってくれたので、

「じゃあ、改めてウチはルシア・ハーヴェストって言うんや。よろしく」

「ああ、よろしく。そついやルシア、腹減ってないか？さっきのワイバーンの肉を焼いたから食うか？」

バニツシュが聞いてきて、ウチは「えっ・・・」と一瞬固まった。そして、

「えええええー、焼いちゃったの!？」

と声を上げてしまい、バニツシュとソフィが驚いたようだった。

そしてソフィが、

「ど、どうしたの？」

つて聞いてくるが、ウチはそれに答えず急いでワイバーンが焼かれている所に行った。

「よかった・・・」

バニツシュからワイバーンを焼いたと聞いて急いできたが、丸焼きではなく食べる分だけ切り取って焼いたらしい。ホツとしながら、ワイバーンの牙を引き抜く。それをポケットにしまったところでバニツシュ達がきた。

「一体どうしたんだよ。急に飛び出して・・・」

とバニツシュが聞いてきた。

「あゝうん、えと説明するとね」

そして、ウチはこの峠を降りたところにあるセイレーンに住んでいて、そこにあるギルドで生計を立てていて、今回ギルドの仕事でワイバーンを討伐しに来たことを話した。

「へえ〜。セイレーン出身だったのか。ところで、ギルドって何？」

バニツシュがそう聞いてきて、ウチは「え、知らないの？」とついで聞き返した。

「しかたないだろ．．．」  
と言ったので、

「ギルドって所は、色々なクエストあるところなの。クエストを達成することでそれに見合った報酬が貰えるわけ。あと、魔物から取れた素材とかをリーフに変えてくれるところでもあるんや」

とギルドについて説明すると、

「へえ〜だからさっきワイバーンの牙を抜いていたのか」

「まあ、そうだね」  
と答える。

「それよりもバニツシュ、よかったね。ルシアがセイレーン出身でソフィが話を振ってきた。」

「??？」

ウチが何故とっていると、

『そうですね〜。これで迷わずにセイレーンに着くことができますね』

答えたのはバニツシュではなく、バニツシュの腰に差してある光輝く剣だった。

．  
．  
．

「えええええ〜!??」

驚いてバニツシュの方を見ると、手を額に当ててしまったという感じだった。

ものすごい勢いで驚かれた。まあそりゃそうか。だって剣がしゃべったんだぜ。普通は驚くよな．．．

目の前では「何、何、今の？」と俺に説明を求めてくるルシア、ソフィに助けを求めると「がんばって!!!」と言う表情をしていた。  
「はあ〜〜〜〜〜」

とりあえず盛大にため息をついておく。

『いや〜大変なことになりましたねえ〜』

レイディアントが他人事のように言ってくる。いや、人じゃないけど……

「いや、レイディアントさん反省する気なしですか」

『まあ、うつかりしてたんですよ。ハッハッハッ』

なんて言っても話が進まないの、とりあえずルシアにどう言おうか考えるがこれといった説明が思い付かないのでしかたなく、俺たちの今までのことを話すことにした。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「と言っ訳なんだ」

俺はルシアにこれまでの経緯を話した。

「いや、うん。何がという分けなのか分からないけどさ……まあ、分かったよ」

と納得してくれたようだ。分からない人は前回の話を読んでくれ。

「まあ、そんなことでセイレーンまでの道案内を頼めないか？」

「うん、別にいいよ。ワイバーンを代わりに討伐してくれたし、ルシアから了解をえたので、

「よし、それならそろそろ行くか」

ソフィに聞くと、

「うん、大丈夫だよ〜」

と答えた。

「じゃあ、ルシア。よろしく頼むよ」

「了解」

そうして、俺達はルシアの道案内でセイレーンへ向けて峠を降り始めた。

降りるときに、

「ルシアって名前と性格が合っていないよな。俺の勝手な想像だけど、名前だけ聞いたらどっかのお嬢様みたいだ」

って言ったら

「うるさい」

と言って蹴られた。

峠を越えて（後書き）

どうでしたでしょうか？

それでは、感想お待ちしております。本当に。

では、ちえりお！！

## 水の都〜セイレーン〜（前書き）

ども〜残月です。やっと投稿することができました。  
それでは、どじょう〜

## 水の都くセイレーンく

ルシアの道案内で峠を下り、今はセイレーンに続く道を歩いている。横には海が見えており、とてもきれいだっただ。

「ここはあまり影響を受けていないね」

とソフィが俺に話しかけてきたので、

「そうだな。見たところそんな風じゃないな」

と返事を返した。

「影響つてなんなの？」

ルシアが不思議そうに尋ねてくる。

『影響つてのはですねー』

レイディアントがルシアに説明する。最初は驚きはしたものの今では普通に話している。

「ふん、なるほどね。光と闇の戦いで闇龍つてのが勝って始まった暗黒時代ね」

『そうなんです。私たちが通ってきたデザートラビンスもその暗黒時代が始まってできたものですよ』

「へえ。あつ。その影響つてのは、セイレーンにも起こってるよ」

レイディアントの話を聞いて思い当たることがあったのか、ルシアがそんなことを言ってきた。

「どんな影響なんだ？」

俺は気になったので聞いてみた。

「えと、たしか5年前くらいからかな。セイレーンは貿易が盛んで海へ出て魚を捕ったり、いろんなところから貿易船が来てたりしてたんだけど。突然巨大な魔物が現われて人を襲うんだ。だから貿易船も来なくなつて、今では貿易はしてないってことかな」

と説明されて、

「ふむ、どう思うレイディアント」

『そうですね。暗黒時代の影響と見てよさそうですね』

「まあ、セイレーンに着いてみないとほんととも言えないな・・・」  
独り言のように呟いて話題を変えることにした。

「そういや、まだ着かないのか？結構歩いたけど・・・」  
俺はルシアに聞いてみた。

「うん？もうすぐ着くよ。あつ、見えてきた」

とルシアが指を指す方向を俺とソフィは向いた。白い建物がちらほら見え、ここからでも町がきれいなのがうかがえる。

「へえ〜早く着かないかな〜」

ソフィが楽しそうに言ったので、

「まあ、もうすぐ着くから」

とルシアが言って、俺たちはセイレーンに向かった。

遠くから見ても美しいと思ったが、近くで見るとまた美しかった。今俺達はセイレーンの町の中にいる。町の中は白を基調とした建物が多く並び、露店などいっぱいあり、人々の活気で満ちていた。

「うわあ~~~~~」

ソフィは目を輝かせながら感嘆の声を上げていた。

「へへー、すごいでしょソフィ」

などと言いながらルシアとソフィが盛り上がっている。

「へえ〜、俺ここに初めて来たけどすごいなあ〜」

『バニツシュ、さっきからそれしか言っていますよ？』

なんてことを言ってくるが、実際すごいとしか言いようがないのだから仕方がない。とりあえず、盛り上がっているルシアとソフィに、

「まず、どうするんだ？」

俺はルシアに聞いてみる。

「じゃあ、最初にギルドに寄っていい？」

と聞いてくるので、

「俺はいいけど・・・ソフィは？」

「私もそれでいいよ」

と早く町を回ってみたいのか、辺りをキョロキョロしながら答え  
ていた。

「んじゃ、ギルドに行くか。ルシアギルドってどこにあるんだ？」

「こつちだよ」

俺達はルシアについて行って、ギルドに向かうことにした。

ギルドの扉を開けると一瞬そこにいる人全員が俺達を見てシーン  
としたが、すぐに喧騒が戻った。ギルドの中は、結構広く腕の立ち  
そうな人達が何人もいた。

「はあく。すごい熱気だな」

俺は見回しながら呟いた。辺りを見渡しただけでも、ここにいる  
人達はかなり腕が立つなと思った。

「おゝい。バニツシュ、こつちこつち」

と気づけばソフィとルシアは奥の方におり、俺を呼んでいたのだ  
ルシア達のところに向かった。ルシア達がいるところに着くと、ル  
シアが受付の女性と何やら話していた。

「やつほく、セラ。ワイバーン討伐してきたよ」

ルシアがワイバーンの牙を出しながら、セラと呼ぶ女性に話して  
いる。

「あらよく一人で倒せたわね？」

「ふん。余裕だったね！」

「ん、そうかしら？じゃあ、そちらのお2人さんは誰なのかしら  
？ルシアの知り合いみたいだけど」

と俺達に話を振ってきたので、自己紹介をする。

「俺の名前はバニツシュ・ローレルだ」

「私はソフィア・エレクトラムといいます」

「あら、これはどうもご丁寧に。私はセラよ。このギルドの受付を  
しているわ。それで、実際はどうなの？」

なんて聞いてきて、えくと俺はどう答えようが迷ったが、素直

に答えることにした。

「実際はルシアがワイバーンにやられそうだったので、俺達が倒しました」

「ちよっ．．．！！」

ルシアが何かを言おうとする前にセラさんが、

「やっぱりね」

と笑顔で言った。その言葉に俺とソフィが??という顔をしていると説明してくれた。

「実は今回ルシアに頼んだワイバーン討伐依頼はね、ルシアにはちよつと難易度が高いものだったのよ」

「何でルシアにそんなのを頼んだんですか？」

俺はあきれながら聞くと、

「いや、私もやめときなさいよって言ったんだけど。どうしてもって言うから、つい」

と言ったので、俺は「はあ」とため息をついてルシアを見た。

ルシアは「うっ．．．」といいながら

「し、仕方ないじゃん。お金が欲しかったんだし．．．」

なんてことを言ってきた。

「まあ、とりあえずー！ー！ー」

セラさんが場を仕切りなおすように言った。

「今回の依頼報酬はどうしましょうか？」

とルシアを見ながら言った。

「ワイバーンを討伐したのは、バニッシュ君とソフィアちゃんだし

．あつ、バニッシュ君、ソフィアちゃんって呼ばせてもらっわね」

それにルシアは、

「うぐ．．．」

と言葉に詰まる。それを見た俺とソフィは、

「まあ、俺達は報酬はいりませんよ。なっ、ソフィ」

「そうだね、私達別にお金が欲しいから助けたわけじゃないしね」

という俺達の言葉を聞いて、ルシアの顔にみるみる笑みが広がり、

「やったね。ありがとう」

大喜びだった。

「まあ、あなた達がそう言うんならいいけどね」

そう言っつて、リーフの入った袋をルシアに渡した。

「ところで」

俺はセラさんに尋ねる。

「ここっつて、魔物から捕れた素材の換金もしてくれと聞いたんですけど．．．どこでできるんですか？」

「ああ、換金ね。それならここで出来るわよ。どんな素材かしら？」

「ええ、これです」

そう言っつて、素材を渡す。素材内容は、マッドウルフの毛皮2枚、ストーンゴーレムからとれた石が数個というものだ。

「ちよつと待っててね」

そう言っつて、セラさんはおれが出した素材を持って奥の方に入っつていった。

## 数 十 分 後

「おまたせ」

と言っつて、セラさんが奥から戻ってきた。

「うんと、今回の素材は1500リーフってところかしらね。この素材を換金する？」

「ええ、お願いします」

俺は素材をリーフに変えてもらった。所持金0リーフから1500リーフ。

「よし。とりあえず、リーフも手に入れたし、次は宿探しかな」

「あら、まだ宿を探していないの？」

セラさんが聞いてくる。

「ええ、どこかいいところありませんか？」

「そうね〜・・・あっ、そうよ。ルシアの家はどうなの？」

とセラさんは少し考えた後ルシアに向かってそう言った。

「えっ・・・ウチの家に？」

「そっ、ワイバーン討伐も手伝ってもらったんだし、お礼はしなくちゃね」

「う〜ん」

とルシアは悩んでいるようだ。

「別に無理しなくてもいいぞ？」

「そうよ、私達は宿を探すから」

俺とソフィはルシアにそう言った。

「あっ、いや、泊まるのは別にいいよ。部屋余ってるし。ただ・・・

」

「ただ？」

「部屋が散らかってるから少し待っていてくれない？片付けてくるから」

と焦ったように俺達に言った。

「ああ、いいよ。それが終わるまで俺達はブラブラしてるから」

「うん。なら、夕方頃にまたここに集合してね。それじゃ！！」

そう言っつて、ルシアが飛ぶようにギルドを出て行ったのを見送った後、

「じゃあ、俺達も町を見て回るか」

「そうだね〜」

「それじゃあ、セラさん。また後で来ますね」

「ええ、それじゃね〜」

そうして、俺達はギルドを後にした。

ギルドを出た俺達はセイレーンをブラブラしていた。

「あっ・・・」

突然俺が声を出したのでソフィが、

「どうしたの？」

と聞いてきた。

「いや、カケラがどこを指しているのか確認してなかったと思って  
こちら辺に塔があるかもしれないし」

そう言っつて、俺はポケットから光輝いているカケラを取り出す。  
すると、カケラの光がある方向を指す。光が指す方向は海に向かっ  
ていた。

「うーん、海の家にあるのか？」

俺はそう呟いた。

「とりあえず、もう一度ギルドに行っつてセラさんに聞いてみない。  
ギルドの人だから何か知っつているかもしれないし」

「そうだな。そうするか」

ソフィの案に俺はうなずいて、ギルドに戻ることにした。

「海の上に塔があるかって、ええあるわよ」

セラさんは当たり前のように言った。

「この港を出て、西に行っつたところにあるわよ。この町の人た  
ちは水の塔っつて呼んでるわね。でも、あなた達なんでこんなこと聞  
くわけ？」

セラさんにそう聞かれたので分けを話す。さすがに本当のことを  
言っつわけにはいかない。

「いや、俺とソフィは冒険家なんですよ。それで、この大陸の各地  
にある5つの塔のことを聞いて、興味が湧きまして、それで塔を探  
しながら旅をしてるんですよ」

「へー、そうだったの？」

うん、ルシアの時と違っつてレイディアントもしゃべっつてないし、  
今回はうまくごまかせたな。セラさんも納得したようだし・・・  
「で、本当にそれだけなの？」

うん、あまり納得してなかつた。それから俺はセラさんからくる

多くの質問に耐え抜き、セラさんの方も、

「まっ、そういうことにしておきましょうか〜」

と満面の笑みで納得してくれた・・・と思う。

「う〜ん、でも困ったわね〜」

「何かあるんですか？」

「いえ、その水の塔に行くための船なんだけど、今はどこも出すことが出来ないのよね〜」

そう言ったのに、ソフィが、

「それって海に出現したっていう巨大な魔物のせいですか？」

「あら、知ってたの？」

「はい、ここに来る途中にルシアに教えてもらったんです」

「そうなの。まあ、そういう訳で今船はどこも出してないのよ〜」

セラさんが俺達にそう言った。

「でも、そこを何とかありませんか？お願いします！」

俺はセラさんに頼んだ。

「ん〜」

セラさんは少し悩んだ後、仕方ないという感じで、

「分かったわ。そこまでお願いされたなら仕方ないわね。ちょっと私の知り合いとかに聞いてみるわ」

「本当ですか！！」

「ええ、まあ少し時間がかかりそうだからそこは我慢してね。それじゃあ、ちょっと探してみるから。そうね〜2日くらい待ってもらえる？」

そう聞いてきたので、

「「分かりました」「「ありがとうございます」「」

俺とソフィは2人で礼を言った。セラさんはそれにうなづいて奥の方に戻っていった。

「よし、これで水の塔に行くための方法が得られたな」

「そうだね〜それよりもこれからどうする？夕方までまだあるけど」

「そうだな、早いけど次の戦闘はおそらく海の上だし、それに向け

ての準備でもするか。必要なものを買っていくか」

俺の提案にソフィは、

「賛成〜セイレーンの町もまだ見て回りたかったしね〜」

とうなずいてくれたので、俺達はギルドを後にして、次の戦いの準備兼セイレーンの町の探索に行くことにした。

「ああ、疲れた〜」

俺はイスに座り、ぐったりしていた。俺達は再びギルドに戻ってきた。次の戦いに備えての準備を先にセイレーンを回って、必要な物を買っていたのだが、それだけでこんなに疲れはしない。必要な物を買った後のソフィの付添でこうなったのだ。セイレーンのようなでかい町に来たのが初めてなので、ソフィはものすごいしゃぎようで次々と飛ぶようにいろんな露店を見て回っていったのだ。このままでは俺が持たないと思い、そろそろルシアが戻ってくるんじゃないかと言って、何とかギルドに戻ってきた。本人はまだ回り足りなさそうだったけど・・・

まあ、こういう訳で今俺はお疲れモードだ。

「ふう〜」

「どうしたのよ。ため息なんてついて」

と俺に言ってきた。

いや、こんなに疲れてるのはソフィさんのせいなんですけどね！  
とは言わないでおく。っていうか、あんなに回ったのに何であるかに元気なんだ？

「ソフィはすごく元気そうだね」

「そりゃ〜ね。こんなに露店がいっぱい並んでる所に来るのなんて初めてだったし。いや〜楽しかったな〜。セラさんが言うには、船が手配されるまで2日くらいかかるって言ったから、明日はルシアと一緒に回りたいな〜」

そんなことを言っていたので、ああ、明日もかなり疲れることを覚悟しとかなきゃなとか思ってしまった。そんなこんなでソフィと

明日どうするかとか話していると、突然ギルドの扉が勢いよく開いた。回りの人が一斉に扉の方に向いたので、俺達も何事かと思つて見ると、そこには息を切らしたルシアがいた。周りの人たちは何だかルシアかという表情でまた酒を飲み始めた。俺達はまだ、ずうーとルシアの方を見ていると、視線に気づいたのかこちらに向かつてきた。

「いや〜ごめんごめん。部屋の片づけが思いのほか手間取っちゃつて遅くなっちゃった。待った？」

「いや、そんなことないよ。もう片付けは終わったのか？」

「うん。バツチリだよ」

「んじゃ、行くか。ソフィ行くよ」

俺はソフィに声をかけた。

「あ、うん。ねえルシア、明日セイレーンを案内してよ〜」

「いいよ。じゃあ明日はセイレーンのいい所をいっぱい案内するね」  
ルシアとソフィはそんな話をしながら、俺は「はあ〜」とため息をついてギルドを出た。

「ここが我が家だよ！！」

ルシアは一軒の家の前で止まって言った。

「ここがルシアの家か・・・」

俺は家を見ながら呟いた。ルシアの家はセイレーンの通りから少しずれたところにあつた。周りに露店もないから人もあまりいなく静かだった。

「いい所に住んでるんだなあ」

「へへ〜」

ルシアは俺の言ったことに嬉しそうに笑った。

「まあ、とりあえず、入つて入つて〜」

「は〜い。お邪魔します〜す」

「お邪魔します」

俺とソフィはルシアに招かれてルシアの家に入った。

ルシアの家は広くきれいにしてあった。まあ、片付けたって言うてたから当たり前か。なんてことを思っているとソフィが、

「そういえば、ルシアのご両親は今日はいないの？」  
とルシアに聞いていた。

「ううん、ウチの両親は2人ともいないんだよ。ウチが小っちゃかった時に亡くなったんだ」

そうルシアが言つて、ソフィがハツとして、

「ご、ごめんなさい。そんなことは知らなくて」

「ああ、いいいいいよ。知らなかったんだから」

ルシアは一瞬さびしそうな顔をしたけど、すぐに笑っていた。

「とりあえず、ご飯にしようよ。お腹すいたでしょ」

「ああ、そうだな。何を食べるんだ？」

「それはこれから作るのさ！！」

「あ、じゃあ私も手伝うね」

「ありがとう」

そう言つて、ルシアとソフィはご飯を作り始めた。俺は、

「まあ、待つとくか」

『バニツシュは何もしないんですね』

「だって、俺がいても邪魔になるだけだろ」

『まあ、確かにそうですね』

レイディアントとそんな話をしながら時間をつぶした。

ソフィとルシアが作ってくれたご飯を食べながら、俺は明日のことについて、ソフィとルシアと話していた。

「船を出せるまで2日はいるらしいから、明日はどうしたい？」

俺は、ソフィとルシアに聞いてみた。いや、まあ、さっきソフィがルシアにセイレーンを案内してと言つていたからそうなるんだろうけど・・・一応、聞いてみる。だって、今日のソフィについて行って疲れたし、もしかしたら案内以外になるかもしれないと期待してみたが、

「明日はセイレーンの案内をしてもらうんだよ!」

「ですよ〜」

ソフィ考えは変わらず、俺はもうあきらめることにした。

「まあ、セイレーンの案内はウチに任せといてよ。いっぱい紹介したいところがあるからさ」

ルシアも乗り気なようだし。

「なあ、だったら今日はもう寝ないか？」

「えっ、もう寝るの？」

俺が言ったことにソフィは驚いたようだった。

「まだ、ルシアと話したいよ〜」

「いや、明日いろいろ見て回るんだろ。早く寝ないと途中でバテるぞ」

「まあ、確かに明日バテるかどうかはともかく、今日はワイバーンとの戦闘もあったし、早く寝よ」

ルシアもそう言ったので、ソフィも仕方なくと言った顔で「はい」と返事をした。

そういうことで食ば終えた皿などを片付けて、ルシアに部屋に案内してもらい、俺は

「明日も忙しくなるんだろうなあ」

と独り言をつぶやいて、就寝した。

## 水の都くセイレーンく（後書き）

どうだったでしょうか？日常の話を書くのはとても難しい・・・  
誤字・脱字があれば指摘してください。また、感想がありましたら  
ぜひ書いてください。作者が泣いて喜びます。  
では、ちえりお！！

## セイレーン観光(前書き)

ども〜残月です!!一か月ぶりの更新です。色々と諸事情で投稿するのが、遅くなりました。

では、どうぞ〜

## セイレーン観光

「う．．．ん．．．」

俺は窓から差し込む光で目を覚ました。体を起こし、

「ふあああ〜」

大あくびをして、辺りを見渡す。そういえば、ここはルシアの家だったな〜と思いだし、ベッドを抜け出す。すると、

『おはようございます、バニッシュ。珍しいですねあなたが自分で起きるなんて』

とレイディアントが話しかけてきた。

「まあね、ここ最近訓練してなかったからな．．．ちょっとやろうかと思つて」

『今日はどんな訓練をするんですか？』

「そうだな〜レイディアントの力の解放率を上げる練習でもするかな」

そう言つて、俺はレイディアント（剣）を持ち、外に出ることにした。

ルシアの家を出て、庭の方へ回る。勝手に入っても大丈夫かなと思つたが、まあ後で謝ればいいかと思つて庭に入った。庭に入り、レイディアントの力を解放する。

「まずは、40%」

そう言つて、40%の力を解放する。その状態を保ち、体を慣らしていく。ある程度慣れたので、さらに解放率を上げる。

「50%」

50%に上げた途端、一気に体に負担がかかるのを感じた。

「くっ．．．」

うめき声が漏れたが、それでも解放率をとかないまま、体を慣らしていく。

10分・・・20分・・・30分位たったところで体に限界を感じたので、解放をといた。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

『大丈夫ですか？バニッシュ』

レイディアントが心配そうに聞いてくる。

「はぁ・・・はぁ・・・あぁ、大丈夫だ」

俺はレイディアントにそう返した。

「それにしても、40%までなら普通に大丈夫なんだけど、50%に上げた途端これだから・・・」

全く動かなかつたのに、これだけ疲れるのだから、戦闘の時の負担はもつとでかい。

『それでも、前よりも長く解放出来てましたよ。少しずつ身体を慣らしていけばいいんです』

レイディアントはそう言ってくれるが、やっぱり少し焦る。

「そうなんだけど・・・地の塔でやり合ったジャックには50%でも歯がたたなかったからな。さらに、ジャックと同じくらいの強さを持つ仲間と閻龍がいるんだ。少しずつ慣らしていたらそれだけ被害が大きくなる」

『それでも、無理をして体を壊しては元も子もないですよ』

「まぁ・・・そうだけど」

確かにレイディアントの言う通りなんだけど、どうしても考えってしまう。

そんな俺の考えを読んだのか知らないが、レイディアントが、

『今日の訓練はこれくらいにしましょう。そろそろソフィとルシアが起きてくる時間ですよ』

と言ってきた。

「そうだな。腹も減ったし、これくらいにするか」

レイディアントの言葉に感謝しながら、俺は立ち上がる。そして、ルシアの家に帰ることにした。

ルシアの家に戻ると、すでにルシアとソフィは起きていて朝食の準備をしていた。

「おはよう、バニツシュ」

「おはよー」

「おはよう、ソフィ、ルシア」

俺は2人に返す。

「バニツシュどこに行つてたんだ？」

ルシアが俺に聞いてきた。

「ああ、久しぶりに訓練をしようと思ってな。勝手に庭の方に入ってしまった。ごめん」

勝手に入ったことをルシアに謝る。

「いや、まあ別にいいよ。それより朝食が出来たから食べよ」

「そうだな」

そう言つて、俺は席についてルシアとソフィと朝食をとった。

朝食を食べながら、今日どういう風に回るかを話した。

「そういや、昨日2人はどこら辺を見て回ったわけ？」

ルシアはそう言いながらセイレーンの案内図を広げて見ていた。

「昨日はそんなに回ってないね〜ギルドのあつた通りを見て回っただけだから」

ソフィはそんな風に言うが、俺はその通りだけでもかなりの露店があり、十分だったと思うが．．．それは言わないでおく。

「それなら今日は、中央広場の方を中心に見て回ろうか」

とルシアが言った。

「中央広場？」

ソフィがルシアに聞く。

「そそ、セイレーンの町はね大まかに4つに分かれてるんだ。一つは住宅街。私の家もここにあるからね。二つ目は表通り、昨日ソフィとバニツシュが回ったところだよ。三つ目は港。まあ、ここは昔は人も多くて楽しかったんだけど．．．今はやってないけどね．．．」

そして、最後に四つ目は中央広場。ここは、露店とかそういったものじゃなくて、大きいお店が並んでるね」

ルシアは、地図を指しながら一気に説明をした。

俺はついていけなかったが、ソフィはついていけたらしい。ルシアの説明に頷きながら、

「じゃあ、中央広場に行こう」

と楽しそうに言った。

そういうわけで、中央広場に行くために俺達は朝食の後片付けをしてルシアの家を出た。

「ここが中央広場だよ」

ルシアが俺達に向かって言った。

「うわ~~~~」 「へえ~~~~」

俺とソフィは2人そろって感嘆の声を上げた。昨日回った表通りも人が多くて活気があったが、ここはもっとすごかった。辺りを見回すと何故かカップルが多かったが...

「ここは、セイレーンではデートスポットとしても有名だよ」

と俺が思ったことを読んだのかそんなことを言った。

「へえ〜そうなのか」

俺はルシアに相槌を打つ。すると、ソフィが

「じゃあ... バニッシュは今両手に花だね」

「あ、そうだね」

ソフィの言葉にルシアも乗って、何を思ったのか2人して俺の手を握って、

「それじゃあ、行こう〜」

と手を引っ張って歩き出した。

「ちょ... 2人とも恥ずかしいんだけどノノノ」

俺がそう言うが、2人には聞こえてなさそうだった。レイディアントが、

『いいじゃないですか、バニッシュ。こんなことめったにないんだ』

から楽しまないよ』

と言ってきたので、

「それもそうだな」

俺は半ばあきらめて2人に連れられて、歩き出した。

まず、中央広場に到着して、一番目についた物があった。

「なあ、ルシア。あのでっかいのって何なんだ？」

俺が指を指す方をルシアも見て、

「ああ、あれは噴水っていうんだよ」

ルシアに教えられて、改めて見てみる。かなりでかくて、てっぺんに何か人が妖精かなんかの像が立っていて、そこから水が噴き出している。

俺は、あのてっぺんにあるのは何か聞こうとしたが、ソフィも同じことを思っていたのか、

「ねえ、ルシアあのてっぺんにある像は何？」

と先に聞かれてしまった。

「あれはね、真水の精霊ーウンディーネーを型取った像だよ。この町の守り神として創られたんだって。確か水の塔に住んでいるっていう言い伝えがあるよ」

「へえ〜そうなのか」

（さすがは、水の都って呼ばれるだけあるな。俺はあまり精霊のことは知らないが、確かすごい精霊だったはずだ）

俺はそんなことを思っていた。ふと、ソフィを見ると、ソフィはまだウンディーネを型取った像を見ていた。

「ソフィどうしたんだ？」

俺は聞いてみるが、

「.....」

何も反応しない。

「お〜いソフィさん？どうしたんだ〜」

とソフィの肩を揺すってやっと気づいたようで、

「ふえ！？あつ、バニツシュ何？」

「いや、なにつて。ずっとあの像見てたからどうしたのかと思っ  
てな」

「ああ、ちよつとボオーとしてただけだよ。あはは．．．」

「そうか？」

「うん、そうそう。ルシア他のところも見て回ろうよ」

とソフィはルシアに次はどこに行くかを話し始めた。まあ、あき  
らかにおかしいけどまあいいか。俺はそう思い、先に歩き始めたソ  
フィとルシアの後を追った。

もう少し中央広場を回ろうということになったので、俺達三人は  
中央広場にあるお店を見て回りながらブラブラしていた。そこで、  
ソフィがある一軒の店の前で立ち止まった。

「どうかしたのかソフィ？」

俺が聞いてみると、

「バニツシュ、この中に入ってみようよ」

と目をキラキラさせながらこつちを向いた。俺はどんな店なのか  
を確認して、

「ああ、アクセサリの店か。本当ソフィは好きだよな」

そういえば、前ソフィの家に行った時ソフィの部屋にいつぱいあ  
ったな〜と思いだしていた。

俺が前のことを思い出していると、

「ルシアも入る」

ソフィはルシアも誘っていたが、ルシアは、

「えっ．．．ウチはいいよ。こういうお店ってニガテだし。他のと  
ころに行こうよ」

なんて言ってるが、ソフィはそれに構わず、

「いいから入るのー」

と子供のように言っつて、ルシアを引っ張って店の中に入っていつ  
た。店に入る直前にルシアが、

「バニツシュ、助けて〜」

と叫んでいたが、俺はそれにご愁傷様という合図を送った。  
まあ、外にいてもつまらないから、俺もソフィとソフィに連れ去られたルシアをおって店の中に入った。

店の中は色々なアクセサリがあった。ソフィは店の中をルシアを連れまわして、いろいろ見ているようだった。俺も店の中をブラブラしていると、一つのコーナーのところに目がいった。

「魔法石と契約の石？」

そう書かれたプレートを見る。魔法石はまあ、分かる。事前にこの石に魔力を溜めておくことで、魔術師のような魔法を使う者は、その石から魔力を取り出して使えるというものだ。

「魔法石はいいとして、契約の石ってなんだ？」

俺が考えていると、いつの間にかソフィとルシアが俺の隣にいた。まあ、ルシアはぐったりしてるけど・・・

「わあ、契約の石だ〜」

「ん？ソフィ、この石のこと知ってるのか？」

「当たり前だよ。精霊術士なら誰もが知っているよ。まあ、実物を見たのは初めてだけど・・・」

そう言っつて、ソフィが契約の石について説明してくれた。

「契約の石って言うのはね、精霊と契約するのに必要な石なんだよ」

「ん？なら、ソフィは契約の石を持ってるんじゃないか。精霊と契約してるんだろ？」

「確かに私は精霊と契約してるけど石は使ってないの。というのもね、精霊にも階級があつて、下位精霊は契約の石を使わなくても力を借りることが出来るの。上位精霊・・・まあ、例を挙げると、真水の精霊ーウンディーナーとかがそれに当てはまるかな。上位精霊の力を借りるには契約の石を使わないといけないの」

とソフィの説明に、

「なるほど」

とうなずいた。一見ただの石に見えるけど、そんなに重要な物だ

ったとはなぐなんて思っているとソフィが、

「これいくらするんだろ？．．．あつ、1500リーフだってバニツシュユー！」

なんて言ってきた。

「うん、ソフィ。それで何で俺にそんなことを言っただい？」

なんとなく予想は付いたが、一応聞いてみた。

「買ってくれないかな？」

「ふう．．．やっぱりか．．．ソフィ、今の俺達の全財産は1500リーフなんだぞ。ただでさえ、昨日買い物して1500リーフもないのに。買うことなんてできないぞ」

「えっ、でもウチがもらったリーフの半分を渡したじゃん」

いつのまにかルシアが戻っており、そんなことを言ってきた。確かに昨日ルシアがやっぱり全額もらったのは悪いということ、報酬金の半分をもらったのだ。だいたい1000リーフほど

「それでもだ。これ買ったら、残りリーフがほとんどなくなるからダメだ」

俺がそう言うと、ルシアが、

「買ってあげればいいじゃん」

と言ってきた。全くルシアは他人事だと思つて、いやまあ、他人事なんだけど．．．俺がそんなことを思っていると、

「ねえ．．．バニツシュ．．．」

再びソフィが言ってきたので、ダメだと言おうとソフィの方を向くと、

「買って．．．くれない．．．？」

と上目遣いで目元を潤ませながら頼んできた。これには俺もダメージがあった。

「ぐはっ．．．」

そのままソフィは「うゝゝゝゝ」と可愛くうなりながら俺を見てくる。

くそ、それは反則だろ。そんな顔されちゃ買ってしまいそうにな

るだろ。俺はあまり女の人と付き合いがないからわからないが、ソフィがかなりの美少女だということは分かる。数秒間考えて、結局「仕方ないな」。わかったよ、買ってあげるよ」と言ってしまった。

「やった〜。ありがとうバニッシュ」  
ソフィはとても大喜びだった。残りリーフ460リーフ

ソフィに契約の石を買ってあげて、俺もいくつかの魔道具を買った。魔道具っていうのは簡単にいうと魔力のない人でも使用できる道具だ。例えば、火をおこしたり、明かりをつけたりとかが出来るものだ。それらを買って、特に用もなくなったので俺達は店の外に出た。ちょうど昼の時間だったので、ルシアのおすすめの店で昼食をとった。代金はルシアが払ってくれるということなので、ありがたくそうさせてもらった。

そして、俺達は住宅街にあるルシアの秘密の場所に来ていた。  
「ここがルシアの秘密の場所か？」

俺はルシアに聞いた。

「そだよ。ここは住宅街でも特に人が来ないからね。ウチのお気に入りなんだ。それになにより見晴らしが最高だし」

そう言って、ルシアは海の方を見る。今俺達がいる場所は住宅街の広場のようなところでベンチが数個置いてあるだけの場所だった。そこからだと海が一望できた。

「確かにすごくきれいだ」

俺はルシアにそう返した。ソフィはというと、昼食を食べた後だからかイスに座って眠っていた。まあ、天気もいいし、暖かいから眠くなるのも分かる。

「ふああ〜俺もなんか眠くなってきたな」  
気持ちよさそうに寝ているソフィを見てるとこっちも眠くなってくる。

「あはは、ソフィかなりはしゃいでたからね〜」

「まあ、そうだな。もう少しここにいたらルシアの家に戻るか？」  
俺はルシアに聞いてみる。

「そうだね、ほとんど回りたいところは回ったから、そうしようか」  
そんなことを言っつて、ソフィが起きるまでのんびりした後、ルシアの家に帰り、今日の疲れが出たのかみんな眠かったので、眠りについた。

## セイレーン観光（後書き）

やっちまったー！ー！ー！ー！なんだこのぐだぐだな終わり方は．．．

orz

すみません。終わり方が全く思いつかずこんなことになってしまいました。

次からはこんなことにならないように気を付けますんで見捨てないでください。

誤字・脱字などありましたらお知らせください。

来年からは、1週間に一話ペースで投稿できるように頑張ります！

それでは、よいお年を！

ちえりお！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2642u/>

---

世界を救う龍と少年の物語

2011年12月31日17時50分発行